

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

第七十卷 第三号



3

日本幼稚園協会



★保育の原点をさぐる全10巻

ユニークで正確な資料に基づいて執筆されたこの全集は、従来の保育学に科学的な基礎づけをしたものとして高く評価されており、このご好評におこたえし、フレーベル館では全巻完結記念特価セールを実施中です。この機会に、お手もとにせひお備えくださるようおすすめします。A5判・上製本・ゲー入つき

日本保育学会監修

日本保育学会発足20周年記念出版

# 保育学講座 全10巻

★全巻完結記念特価

全巻先渡しセール実施中!

各巻定価・1200円

セット定価・12000円

一時払特価・10000円

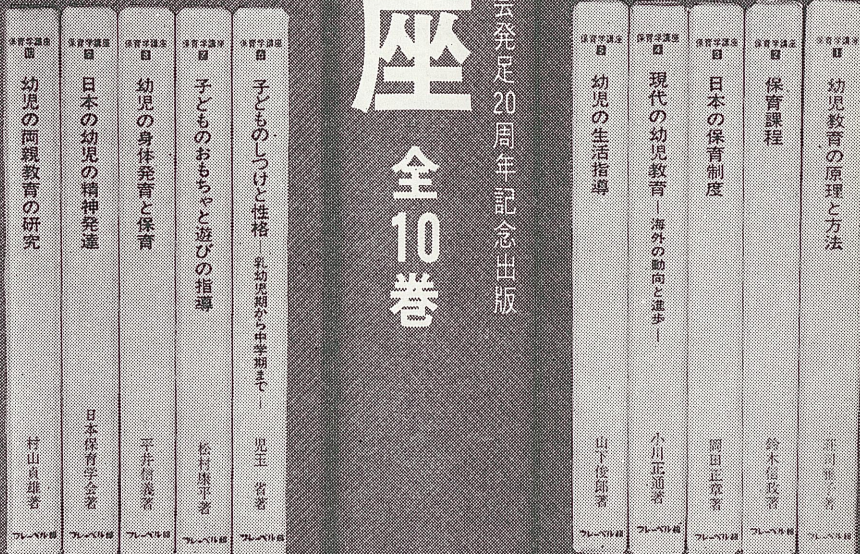
分割払特価(5回払)・11000円

分割方法

第1回・3000円

第2回より・2000円×4回

●申込締切日 昭和46年5月末日





# 幼児の教育

第七十卷 第三号





幼 児 の 教 育 目 次

——第七十卷 三月号——

表紙 小野木 学  
カッ ト 齋藤 信也

★講演

- 子どもとうた……………時 実 利 彦…(4)
- 子どものあそびと自然……………津 守 真…(12)
- 手先の動きと子どもの感情⑨……………清 水 エ ミ 子…(18)
- 清水エミ子氏「手先の動きと子どもの感情」について……………立 川 多 恵 子…(26)
- 遊べない子と現代の幼稚園
- (3) 日本伝承遊びへの招待……………有 木 昭 久…(28)





★座談会

幼児の音楽について……………司会 本田 和子

出席者 堀合文子・関 治子

加勢るり子・津守 真・依田満寿美…(44)

人ーフランスス・G・ウィックス夫人

幼年期の内的世界(三)……………秋山 達子…(51)

★ユートピア……………鈴木 直美…(58)

幼稚園のある一日——九月……………内田 和子…(60)

★こんな本・あんな本……………本田 和子…(70)



◇講 演◇

子 ども と う た

馬の子は生まれるとすぐ四足で親馬と同じように走り、狼の子ははじめはよたよたですが、二週間もすると親と同じ行動をします。動物によって多少は違いますが、ほとんどすべての動物は、人間のように長い間母親の世話にはなりません。私たち人間が生まれてすぐ歩くわけにいかず、口をきくわけにもいかないのは、私たちの心や行動をあやつる「脳」が極めて未熟な状態で生まれてくるからにはかなりません。

スイスの動物学者ホルトマンは、人間の胎児、嬰兒の成長過程と、動物のそれらの場合とを詳しく調べて、人間ほど未熟な状態で生まれ出る動物はない、人間は生理的早産だといっています。もし人間が猿と同程度に脳が発達して生まれるとすると、二十一月は母親の胎内にいなくてはならず、赤ん坊はおぎゃあといつて生まれるかわりに、母親の顔を見るときになり、「こんには、

時 実 利 彦



お母さん！」とあいさつするに違いありません。

私たちは、赤ん坊が生まれるとこれを育て、子どもを教育し、希望と期待を託して勉強させますが、それは未熟で生まれてきたその子の脳を、人間としての脳に成長させ、働かせるようにしてやるためです。未熟な脳が日数、歳月を経て成長発達し、重さも赤ん坊の時は四百グラムが、おとなでは千グラム以上になります。このように脳が大きくなるということは、脳の細胞の数が増すので、脳細胞の容積が大きくなるのでもありません。

脳の細胞は多くの突起を出していて、その突起によって他の細胞とからみあっています。そしてそのからみあいができるはじめて脳として働くわけです。生まれ出てくる赤ん坊の脳の細胞の数は、おとなの脳の細胞の数と同じであり、後日いくら勉強しても鍛えても、一つも増えません。また脳細胞の容積も大きくはなり



ませんが、かわりに多くの突起を出して、互いにこれがからみあ  
っていく——そのからみあいの発達が、とりもなおさず脳が大き  
くなる、ということでもあります。

脳の発達の状態を、最近は普通二つの時期に分けます。第一は  
生まれてから三歳頃までで、もちろんそれには個人差がありま  
す。第二は三歳から十歳頃までですが、二つの時期にできる脳の  
配線は、それぞれ違った働きをする脳細胞の配線で、したがって  
私たちが保育や教育に当たる場合、それぞれ違った働きをする脳  
細胞が時期を違えて配線されるという事実をふまえて、これに対  
応した適切な内容のものとすることが必要です。

よく保育の近代化、教育の科学化が唱えられ、各種施設の上  
が試みられますが、それにもまして大事なものは、科学的に明確に  
なっている脳の発達段階に相応した保育内容、教育内容のくふう  
であり、これこそ今日の社会の真の要請であると思われれます。

さて、○歳から三歳までは模倣の時期で、赤ん坊は、母親や保  
育者の示す手本をそっくりそのまま、無批判に無選択に、自分の  
脳の配線の材料とします。したがって赤ん坊をしつけるというこ  
とは、母親や保育者が赤ん坊に接する態度を正しくするというこ  
とで、福沢諭吉先生のお言葉に、「子どものしつけは言葉による  
べからず、眼によらしむべし」とあります。

三歳が過ぎて十歳頃になると、子どもの態度ががらりと変わ

り、おとながああせよ、こうせよと言うと、必ず反抗します。そ  
れは子どもの脳の中に、自分で考え自分でしようとする「やる気  
を起す」という脳細胞のからみあいがはじまってきて、このか  
らみあいがほぼでき上がるのが十歳頃だからです。やる気を起こ  
すとは、むずかしくいえば創造性です。この創造の精神が芽ば  
え、実際にそのような脳細胞がからみあって以後、そこからは汲  
めどもつきぬ創造の精神が湧き出すのです。

昨年(44年)三月二十九日NHK放送記念日の番組に、「成長  
の記録・四歳児の椅子」というのがありました。大阪のあるサラ  
リーマンの四歳のお子さんの幼稚園生活一年間を追跡して一時間  
にまとめてあり、大変印象的なものでした。ちょうど三歳から四  
歳にかけて模倣の時期から創造の時期に入る子どもの姿が、素直  
に浮き彫りされていて、結論では、「四歳から五歳の間に今まで  
は椅子にすわらされていた子どもが、自分から椅子にすわるよう  
になった。そしてまたその椅子を道具として使うようになった」と  
いいました。このように、ある時点で子どもが創造の時期に入  
れるのは、私たち人間だけの特権です。ただ、子どもはもちろん  
知識も経験も乏しいので、よくない行ないや悪い考えを持つこと  
がおかしくなく、それをコントロールしてやるのが教育なのだと思  
います。また、○歳から三歳までは、おとながつめこみ主義で  
やってよいのですが、三歳を過ぎたら、できるだけ創造の精神を



芽ばえさせ、しかもこれを正しい方向へと導いてやらなければなりません。

ところで、このような大切な創造の精神が芽ばえるのは、私たち人間の脳に、いわゆる前頭葉という場所があるからです。前頭葉は、人間だけが持つ非常に高等な精神、ものを考えあるいは創り出す創造の精神、何かしようとやる気を起こす、何かをしようと思ふことに決める意志力、あることをしようと思つてそれがうまくいった時に喜びを、失敗した時に悲しみを、また、あなりたいと思つてなれない自分の姿を見てねたみ、そねみ、嫉妬の心を起こす——というように、思考力、創造性、意志力、そして情操の心の座になっています。

また、前頭葉は私たちをいつも前向きに生かしています。ただ三歳頃の子どもは、いつも現在の瞬間にいて、明日という日はなく、動物の場合も同様です。三歳を過ぎると、未来・将来に思いをいたす、それへ向かつて生きようとしはじめます。この前向きの姿勢で未来・将来に思いをさせ、そこへ向かつていくその刻々の行為の中に、私たちは、時の流れという時間の経過を体験します。

普通、私たちはよく時間・空間といっしょにしていますが、空間の認識と時間の体験は、脳の仕組みからいうと全く異質のもので、動物は空間認識ができますが、時間の体験はありません。一歳や二歳の赤ん坊も、眼が見え出すと十分に空間認識がで

きますが、二歳・三歳では、まだ時間の体験はできません。本当に私たちが時の流れを、時間が経過しているということをもつて体得できるのは、十歳を待たなければならぬといわれています。

したがって、例えば二歳・三歳の赤ん坊におとながいくら約束をしても、またそれをどんどん破つても一向に平気ですが、それは、二歳・三歳では指切りも約束とはならず、明日という日が無いらです。ところがもう二年経つて五歳となると、今度は約束すれば必ずそれは守つてやらなければいけない。四、五歳からは、明日という日を考え、時の流れを体験するからです。

時の流れは大変大切で、私たちが歴史に生きていく、歴史を口にするのできるのも、私たち人間だけのことです。また、物の順序、あるいは序列ということ、さらに物がつながっているという連続の体験も、時の流れから生まれてくる精神です。皆さまも毎日ごらんになっていると思いますが、三歳位の子どもさんの幼稚園や保育所で、おやつの際に、「さあ皆さん、おやつですから順番にいらっしゃい」というと、必ず皆がいっしょになってやって来ます。彼らは決して順番というものを頭で考えるわけにはいかないのです。

私たちおとなは、立派な前頭葉を持っているので、おのずと順序・序列・連続などの言葉を平気で使い、これについてもいつも



不思議には思っていません。例えば、皆さまが今晚お帰りになっておやすみになり、何時間か必ず意識が無くなられるでしょう。

でも明朝お起きになって床の中でご自分の体を見て、はてこの体は何時間前に寝たあの自分の続きなのかどうか——と心配なさるのだとしたら大変です。一晩中ご自分の体を見ておやすみにならないければいけません。幸いにして自己が連続しているという体験を持ち得るのは、私たち人間だけにできることです。

よく人間の脳をコンピューターにたとえて、近い将来コンピューターは人間の脳に取ってかわるのではないかとさえ考える人もありますが、コンピューターの働きは、いつも瞬間にだけあるものです。コンピューターはただそのままでは何の役にも立ちません。これを使ってはじめて価値が出てまいります。

では、コンピューターを使うということは何かというと、その中に適当なプログラムを入れることです。プログラムを入れるという事は、とりもなおさず、時の流れ、タイム・シリーズを入れることです。ここで、うたというものを考えてみますと、うたのメロディーなるものは、一つの時間系列であり、うたで一番重要な要素といえるメロディーは、時の流れにのった精神活動を私たちに要求していることとなります。

私たち人間は、結局、動物には無い前頭葉の働きによって人間になっていますが、教育とはいってもなく人間形成を助けるこ

とであり、具体的には、人間だけが持つ思考力・創造性・意志力・情操の心を、連続の体験、あるいは時間の流れによって、子どもの中に豊かにしてやることです。これこそは、私たち人間が歴史の中に生きているといわれ、そしてそのとおりでもあることのゆえんでしょう。

また、動物の子は親の動物の縮図ですが、私たち人間の子どもは決しておとなの縮図ではなく、三歳頃まではまだ動物です。三歳過ぎて十歳頃までが、やっと、動物から人間になるうとする半人間の状態であり、十歳になって、本当に人間として行動し、人間として振舞うことができる——そのような脳の仕組みになっているのです。したがって、音楽とか舞踊とか、その他さまざまな教科は、すべて、子どもの人間形成に関係するうえで、それぞれ適当な手段・方法を研究することが必要となってきます。

さて、うたについて考えてみますと、踊りでも同様だと思いますが、うたの要素は何かと問うと、それはリズムであり、メロディーであり、ハーモニーである、その上に即興性というものが必要だ、との答が得られます。それらのファクターは、脳の仕組みにとってみると、かなり異質的な性質を持っています。

まず、リズムを考えると、私たちの脳にリズムミカルな刺激を与えるということは、時間を否定した、時の流れの要素の無くなった状態に脳をさせることと考えてよろしい。つまり、リズムミカル

な刺激を与えられると前頭葉の働きは弱まって、その下にある本能の座がむき出しになり、特に集団本能が高まってくるのです。

リズムミカルな刺激・音・または体の動きなどによって、これらに無縁であった間は持っていた高等な精神活動（個を認め、個を主張する高等な精神活動）を一応弱め、傍らの者同士、相互の心を無条件に融合させるような働きをもっています。

メロディーは、それと異なり、時の流れ、時の要素に乗ったものであることは、前にもちよつと触れましたが、私たちがうたの中のメロディーというものを鑑賞し、あるいはメロディーをメロディーとして表現するには、その時の流れを生み出す前頭葉の働きによらざるを得ず、その働きにおいてのみこれが可能なのです。したがって、子どもにメロディー・即興性・あるいはハーモニーを与え、または彼らをこれに導いてやるということは、彼らの前頭葉を鍛えるうえの非常に高等な手段をとることなのです。

もちろん、私たちは言葉ないしは文章によって、お互いに思考力・創造性などを高めることができます。学校でも国語・作文は重要な学科です。しかし、国語というものは、意味が規定された言葉によって組み立てられていて、文章は、いかなれば意味規定のなされた言葉の連続です。それに引きかえ、メロディーは、音の高低・振動数のちがう音の配列などから組み立てられた、いわば言葉なき文章です。

したがって、あるメロディーを聞けば、聞く人のその時の気持によって、いかようにでもそれを聞くことができます。しかし文章であれば、その文章の意味することしかほとんど読み取ることができません。もつとも、それが詩である場合には、かなりその行間に読み取れる、言外の多くの意味がありますが、それにしても、やはり、その詩を組み立てている言葉によって、かなりの制約を受けます。

ところが、うたや、メロディーは、いわば言葉なき文章ですから、あらゆる創造性、あらゆる創造力を、そのうたから、メロディーから、読み取ることができます。したがって、私は、うた・音楽を、本当に正しい、技術に落ちない本当のうた・音楽を鑑賞し、また自分がつくり作曲できるということは、それこそ国語の勉強や文章を作ることよりももっと大切なものであるということが、脳の仕組みから言えるのではないかと思うのです。

ある人から聞いた話に、南氷洋へ鯨を捕りに出る捕鯨船が、長い間陸地から離れている場合、忙しい時はともかく、かなりひまな時をどのようにしてついやすかというところ、さまざまな手段があるうち、第一番に考えられるのは、いろいろな流行歌その他のレコードを持ちこんで、それを聞くことだそうです。

ところが、はじめのうちは、流行歌に人気があるようですが、やがてはみんなあきてしまって、最後に一番聞かれるのは、クラ

シックの音楽だということです。それは、流行歌ではやはり言葉に規定されて、私たちの前頭葉に、自由な発想・自由な活動を否定します。私たちはやはり人間であるからには、そういつもいつも流行歌に浸っているわけにはいきません。自由に発想し、自由に考えようという欲求が起こり、言葉なき文章としてのクラシックなオーケストラやシンフォニーに魅せられて、それに耳を傾けるといふ捕鯨船の若者たちに、私たち人間の本来の姿が出ているのではないのでしょうか。

さて、また、うたや音楽関係の書物には、音楽の歴史はいやになるほど書いてありますが、なぜ人間がかくもうたい、そしてかくも踊るかについては、あまり書いてないようです。しかしある本で私は、「人間の音楽はうたから始まった」という文章を読み、大変に感銘を受けました。

時間の関係で詳述はできませんが、人間がなぜうたい、なぜ踊るか。私たちはお互いにしゃべり、話し合う言葉を持っていて、お互いに意志の疎通ができる。ではなぜに、その上にかくもうたい、踊るのか。それは、まず言葉は、私たちのお互いを個に分裂させる働きを持つ。次に音楽の中のリズムというファクターは、その個の分裂のもとにおいて、お互いの心を融合させる働きを持つ。さらにメロディー、ハーモニー、即興性は、その個に分裂させる働きを、一層高度に持っている。したがって、言葉と音楽と

の結合した形において、うたは、私たちの前頭葉の働きを、そして人間として生きていかねばならない要素を、そのままそっくり持っているのではないかと、思うのです。この辺の消息は、ラジオその他で評判になっている朗読の例にも見られましょう。朗読は、単に文章を普通に読むのではなく、アクセントをつけ、リズムをつけて読むという、多分にうた的要素が加味されています。

このようにして、私たちは、何もただ好きこのんでうたっているのではない、私たちは、人間として、人間形成のためにうたっているのだ、ということ、この点にうたなるものの真髓があるのではないかと思われまふ。

最近、音楽的才能を早く伸ばす手段がいろいろ講じられていますが、三歳頃までは無理に教えるというのではなくて、音楽的ふんい気の中に置くというのがねらいのようです。ちょうど三歳頃までの模倣の時期に、このような状況を作ってやれば、やはり自然に人間の赤ん坊の脳細胞の配線・からみあいができ、それを四歳すぎてもうまく使おうと思うと、非常にうまくそれを使うことができる、ということになりましょう。

以上の諸点に関連して、さらに国民性、民族性、あるいは風土というものが考えられなければいけないように、私は思います。

コダーイ・システムは、主として民謡とか子ども遊戯うたなどで成り立っているといいますが、日本でも同じように、すぐそ



れでやって見ようとしても、恐らくうまくはいかないのではないのでしょうか。それは、コダーイの国ハンガリーと、ハンガリーにおける子どもを育てた音楽的環境には、わが日本と、今までの日本の子どもを育てた音楽的環境に比べて、かなり異ったものがあるろうと思われるからです。

また、いわゆる西洋には西洋のメロディーがあり、日本には日本のメロディーがある。日本語で育っている子どもに、急に四、五歳から英語を交えた話をさせるような企てにも、同様なることが言えるでしょう。コダーイ・システムにおいて、伝統音楽、遊戯うた、民謡などが重視され活用されているのは、ハンガリーという特定の国の音楽環境が、かなり大きな役割をしている結果ではないでしょうか。この研究会でもこれらのことがいろいろ討議され問題提起されると思われますが、十分ご検討を願いたい点です。

四歳から後、自分でやる気を起こす創造の芽の出る時期には、同じくまた時の流れ、連続性、順序、序列の精神が身につくのですから、この大切な時期に、メロディー・即興性、ハーモニーなどを子どもに十分に体得させること、それらを子どもに身をもって身につけさせることは、とりもなおさず子どもの前頭葉の育成になるわけです。実際、思考力とか創造性とか、そのどの一つでもよい、その一つの精神だけでも育ててやることの重要性を私は強くここで指摘いたします。

コダーイ・システムでは、歩くこと、手をたたくことが強調されているようですが、それは、子どもに観念的にもを教えることを避け、大事なものを動作と共に身につけさせよう、とのねらいと思われまふ。また、私は専門家でもなく、あまり勉強もしていないのですが、いわゆるサイレント・シンギングが非常に強調されているのがこの教育システムの特徴だと思えます。サイレント・シンギングは内的聴覚、内的聴感を育成するといわれますが、これこそ前頭葉の働きをそのままねらったものです。

前にも言ったように、私たちおとなは、夜眠って何時間か意識が無くなくても、翌朝眼が覚めれば、自分が同じように続いていることを全然疑いません。これはサイレント・シンギングと同じです。コダーイの音楽教育法では、このサイレント・シンギングによって、しばらくメロディーの流れをサイレントにする。そしてサイレントの間において、次にうたわせる。このサイレントの前には、ストップをかけ、次に後の続きをまたスタートさせる——その連続、反復が、子どもの前頭葉がちょうど伸びようとするときの訓練には、最もよい方法なのです。

私どもは、現在、猿を使っている調べておりますが、二ヵ月程きびしい訓練を経ると、猿は、やっと目前にある物、例えば時計が、十秒間かくされてまた目前に置かれると、これは同じ物だという判断ができます。しかし、ごくわずかに働き出したと思わ

れるこのような猿の前頭葉のその部分を切ってしまうと、同じ実験をやっても今度はもう判らないのです。ということは、完全にサイレント・シンキングができないということで、いわゆるアウト・オブ・サイト・アウト・オブ・マインドなのです。

これに類したことは、先生方が保育所や幼稚園で、始終体験していられます。例えば、チューリップがきれいに揃って咲いている、それが翌日散ってしまったとします。先生は園児に「きのう咲いていたチューリップが、こんなに散ってしまったでしょう」と一人でびっくりしておられる。きのう咲いていたチューリップはきのこのチューリップ、今散っているチューリップは今のチューリップで、サイレント・シンキングがありません。五歳にならないと、そのつながりが出て来ない。そのような連続などの大切な働きを、コグーイ・システムでは、適切な時期に育成する方法が採られているのだといえます。もちろん、さらに楽器を使うことも必要となるでしょうし、楽器使用により効果もあがることでしょうが、それはあくまでも助成の線上にあるものであって、子どもの人間形成の場においては、前頭葉の本当のねらいというものの、どの働きをどのように育成するかということに、第一番に焦点を合わせていかななくてはならないものと考えます。

もう一つ、この教育メソッドの特徴として、いわゆる移動方式というものがとられているようです。それは、「ソルフェージュ

ユ」において、Cをいつもドと読んで歌う唱法を使用し、「絶対音感を重視する音楽訓練法」とは異なり、「それぞれの子どもの出せる音高を基準にして、相対音感による導入をし、その後、おのの主旨をドとして歌う方式による音楽訓練法」であるといえます。これもまた私は大変よい方法だと思います。

前頭葉の大切な働きが芽ばえる四、五歳頃に、できるだけその芽ばえに手をかすのはよいとして、初めからあまりにきびしい型にはめるようなやり方では、かえってその芽ばえを抑制するのではないのでしょうか。いずれ私たちは、いやでも型にはめられざるを得ませんが、それにはおのずと、人さまさまに型にはめられる時期が必ず訪れます。故に、一律に同じように、子どもにある決まった教え方をするというのは、決してよいとは言えません。移動方式による相対音感での教育法は、恐らく最も個に即して、しかも幼い子の負担にならない、有効なやり方だと思われれます。

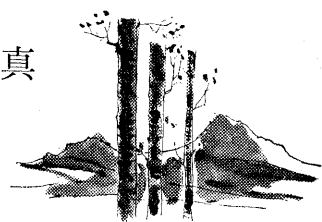
脳の発達段階に応じ、子どもの特質をふまえることもしないで、いたずらに功を急ぎ、うたの本質を見逃したような訓練のやり方をもし進めることがあるとすれば、それはかえって子どもの発達を疎外することになり、本当に子どもを育てるということにはならないでしょう。それは、お互い性急なところのある日本人として、慎重に考えたいことであります。

(四十五年七月二十七日・コグーイシステム研究会の講演より)

# 子どものあそびと自然

津 守

真



幼児の発達に必要なのは、あそびの生活であって、そのあそびの基本的な要素は何か、といえば、子どもの自発性と、子どもをとりまく自然の環境であり、それをつくり、また、なしとげさせるものは、保育者の力でありませう。音楽の場合でも、あるいは描画や造形の場合でも、その他のことがらでも、幼児の問題をとりあつかう場合には、私は、同じことが考えられるだろうと思いません。

もう一度、くりかえしますと、幼児期に非常に重要なのは、子どものあそびである。おとなの生活で、人がなにかいっしょうけんめいにうちこんで、時間もわすれ、あるいは、ごはんを食べたりするよりも、もっとおもしろくやれるような生活がある時にはおとなの労働でも仕事でも、あそびの要素をもってくるわけであ

りましょう。幼児の場合には、おとなのいうような、勤労の生活というものはありません。しかし、何かうちこんでやることのでき、また、それをやることによって、もっとおもしろくなって、次の生活がそこから生みだされていくような生活がなければならぬし、また幼児はそういう精神生活をもつような基本的な性質をもっております。そういう意味で、子どものあそびの生活は自発的である。だから、「あそびでもらうあそび」と、子どもが自分からあそぶ「あそび」というのはたいへんちがうわけで、幼児に必要なのは、自分からあそぶ「あそび」だということがいえます。

それからまた、自然の環境が重要です。子どもは、むかしから自然の恩恵に浴びて育ってきたのです。水であそぶ——今は夏で



すが、プールはこわがる子どもがあるけれど、小さな水たまりだとか、お風呂でバシャバシャやる水だとかは、よちよち歩きの子どもから、小学校の上級生ぐらいになるまで、子どもはほんとは好きである。それから、土と泥をこねてあそぶ、あるいは粘土をこねることを好みます。それから、あたたかいボカボカする太陽の下で、ほんとに心がなごんであそべる。それから戸外で、風や空気の中で子どもはかけまわり、それをたのしみます。

だけど、これだけいえばわかるように、私どもの都会の生活では、こういう子どものほんとに重要なあそびの材料（材料というよりもあそびの根本をなす環境）がどんどんなくなってしまつて、水といつても、小川のせせらぎの水であそべる子どももなくなって、なくなつてしまつた。土といつても、どろんこあそびのできる幼稚園が、この中にどれだけあるでしょうか。お日さまや空気も、この数週間は、ずいぶん公害の問題がとりあげられているように、子どもが外で新鮮な空気を吸いながらかけまわることができなくなつてつあります。こんな根本的なものを子どもの生活に与えることができないで、幼児教育ということを考えるのはなさげなくなつてしましますが、こういうものが子どものあそびの地盤をなすのであつて、これをまた子どもにも回復してやらなければ、人間の成長が、へんてこになつてしまうのではないのでしょうか。

子どもの内側からわき出る生命の力をもつて、子どもがとどろんでいくあそびをなすとげさせるものは、保育者の力である。保育者がいなかつたならば、あそびはほんとはじゅうぶんに子どもの中に展開することができない。その意味で、幼児にとつて、保育者というのは非常に重要なものであつて、ほつておいて子どもはあそべるようになるとは、けつしていえないものであります。

このあそびを形づくつていく基本的な要素を、発達の角度からみたととき、身体運動感覚とそれに伴う精神的なたらしきの重要性をいうことができるかと思ひます。たとえば、話ができるようになる以前の段階でも、子どもにはあそびというものがある。しかもまた、ことばがしゃべれない段階の時に、子どものあそびの非常に重要な部分が作られていくし、また、ことばがしゃべれるようになった幼稚園の子どもなどをみていても、ことばはいわばつけたして、子どもがあそんでいる事柄の根本は、もつと、子どもがからだを動かしたり、手でさわつたり、においをかいだり、からだでふれたりというようなことが中心をなしている。

砂場であそんでいるところをみても、砂場で子どもはいろいろなおしゃべりをしている。しかし、砂場でおしゃべりしていることばだけを記録したとしても、それで子どものあそびはじゅう

ぶんに理解することはできません。子どもがそこで、手でさわったり、ふれたり、こねたり、いじったりすることが重要な部分なのだということをしっかりと理解しないと、子どもの砂あそびについては理解できない。同じようなことが、いろいろなあそびについていえます。

ことばはたいへん重要であるけれども、ことば以前の、体全体で感じるような部分が非常に基本的な機能なのです。

私どもおとなの日常の例を思いだしてみても、実はそういうことがあります。たとえば、何か、あるなつかしい光景、自分の小さい時に育った家だとか、あるいは、昔、卒業した学校だとか、そういうふうなことを思い浮かべた時に、私どもが思い浮かべるのは、学校の校舎であるとか、家のまわりの風景であるとかを目前の中に思い浮かべることができます。けれども、実は、なつかしい風景を思い浮かべる時に、かならずしも視覚的イメージが主な事柄ではない。

もっと、われわれにとってなつかしさを呼ぶものは、目で見た視覚的な、まぶたのうららにうつるイメージではなくて、もっと、そのまわりをとりかこんで、かけまわったり、あるいは、木の幹にふれたような感じであったり、あるいは、人としゃべった、その自分がしゃべったあとに残った感情であったり、あるいは、に

おいであったりというような、視覚よりもっとちがう感覚が、そこに伴っている。触覚、嗅覚、運動感覚、などを総合したようなものともいえるでしょう。

保育のことがらについても同じことがいえます。皆さんがいま、幼稚園のことを思いうかべて、そして「幼稚園で子どもといっしょにあそぶ時に、どんな指導をしたらいいですか」とたずねられた時、ことばではなかなか説明しきれないけれど、自分があるの中に入ったら、こういうふうに動いて、こうやって、ああいうふうに手をだして、こういうふうなものをそろえて、こういうふうにこういって、なんて、ことばではあらわしきれないが、何か、そこで体ごと自分がやるような感じとか、あるいは、ことばにあらわせないような感覚というものがそこで動いているでありましょう。ということは、つまり、保育というものが、われわれが頭で判断したり、理性で判断して、こうするんだということも大切ではありますけれども、またそれよりもさらに、その根本にわれわれがことばもつかわず、また、はっきりした意識をもった理屈もつかわないで、しかも、子どもの中に入って何かを感じとって動いていく、というような生活が根本にあるということも気がつくわけです。同じようなことが、子どもの生活にはもっとあるわけです。

子どもが、黒板の上に一本の線を書いた時に、われわれおとなは、これを一本の線だとみます。「あ、線が書けてるわね」といつて見ます。ところが、子どもが一本、線をスーッと書く時に、それは、一本の線を書くために書いているということはたいへんすくない。おとなはそれを、視覚的に外側からみるけれど、子どもが一本の線を書く時には、相当、時間をかけて手をずーっと動かしていきます。それは動きをあらわしています。「ヒコーキが、ブーンと飛んでいるヨ」と、ブーン、ブーンといいながら線を引いていく時には、結果としては一本の線がそこに残るけれども、子どもはそこに一本の線のみているのではなくて、ヒコーキがブーンと動いていく、その動きそのものがそこにあらわされていて、それが重要なのです。子どものこういう触運動感覚の世界においては、子どもの動きそのものが、直線になるということは、たいへんすくなくて、むしろ、それは円形になってきます。それは、体の生理的な、あるいは、解剖学的な性質からくるものかもしれない。子どもの線は、しぜんにまるくなっていきます。子どもは、線を書く時に、ぐるぐる動いて行く動きをそこに体験しますし、その動きは、じきに、子ども自身の中で、ぐるぐるまわって、うずまきのような形になって、子どもの錯画期の終点においては、子どもの絵は、ぐるぐるうずまき形をして、その一番真中

のほうは、点をいくつかうちつけます。

錯画といわれるものはおとなからいえばめちやくちやがきであるけれども、子どもの精神の世界では、これはけつしてめちやくちやではない。もっと具体的なものを書く段階もおもしろいけれども、その以前に、もっと子どもが感覚でとらえたものを、率直にあらわしたものが、子どもの錯画の段階である。

今、私は絵の問題をきっかけにお話をしたのですが、私はすぐこれで、音楽のことを連想するわけでありませぬ。私は音楽の専門家ではありませんから、子どもの発達の角度から、音楽のことを考えるわけです。

子どもが体を動かして歩くとき、直線で歩くよりも、ぐるぐる円形をなして歩くほうが、もっと基本的な形でありませぬ。子どもに、まっすぐに歩いてごらんなさいというとき、これはなかなかむずかしくて、線路をまっすぐに敷いておいて、この上を歩いてごらんなさい、というのでなければまっすぐに歩くことはむずかしい。ただ歩いてごらんなさいというと、子どもは、部屋の中をぐるぐるうずまき型にまわって、しかもだんだん円がせばまってきたり、小さくなってしまふ。もっと大きくしなさいといわないと、大きくなっていかぬ。つまり、これは円においても、体の動きにおいても、一つの自然な、共通の傾向であろうかとも思ひ



ます。

そういうことを思ってみますと、たとえば、子どもの、体を動かす遊戯や、音楽をともなう遊戯などは、ぐるぐるの円を作って、そして幾重にも同心円を作って、外側の円、中間の円、真中の円と、みんなでぐるぐるの輪になっておどるようなおどりがたいへんおおい。これは子どもがたいへん喜びますし、それからまた、ずっと昔から音楽をともなうおどりというのは、円をなしていくものがおおい。先日学生さんといなかのほうにいった時に、盆おどりをみていて気がついたんですけれど、盆おどりでは、やっぱり、皆が同心円をなして、おどりながらぐるぐるまわります。そして、一番真中にたいこをたたく人がいます。

子どものめっちゃくちゃ書きといわれる錯曲に、円をぐるぐる書いて、そして一番まん中にくつか点をうっていくようなものは、かなり一般的に共通にみられるのですが、そういうまん中に点をうっていくというのは、これは一つのリズムです。

視覚の領域と聴覚の領域、それは単に、視覚、聴覚ともいいがたい。もっとその両方に共通の、触運動的な空間というものがあるのではないかというようなことを、ここでみてくることができませんし、また、音楽の問題についても、同様のことがいえるのではないかということを、私は連想するわけです。

子どもの自然の生活ということを申しましたが、子どもの触運動的感覚、あるいは、触運動的空間というのは、一つのまとまりをもった、そして中心にむかって動いていく傾向をもったものであり、その中心を求めて動いていく子どもの性質というものを、子どもはここで重視しなければならないのではないかと思う。子どもの、どの段階でも、それがきれいな円形をなし、中心をなしていくとはかぎりません。子どものある段階では、子どもは新しい要素に気がつく、今まで書いていた絵とはちがった段階に、あるいは、新しい要素に気がついた子どもの精神生活は、そこで一度やぶれて、くずれます。やぶれた時に、そこで子どもはもう一度、その新しい要素をとり入れながら、自分で中心を求めて動いていきますが、その途中では、それがうまいくなくて、まるでもつれた糸玉のような、あるいは、何を書いたのか自分でもわからないような混乱した精神状態を示す段階があります。

子どもは、その段階だけをみた時に、その子どもが反抗的であるとか、あるいは乱暴であるとか、あるいは何もしないとか、落着きがないとか、いろいろいます。

しかしそれは、私どもが、外側から子どもの発達のある断面をみた時の、われわれの印象であるにほかならない。子ども自身は、じつは、そういう時ほど、自分みずからの精神の中心を求め

て、何ごとかを、たぐり求めて動いているものである。だから、参観者や外来者が、ちょっと幼稚園の部屋をのぞいて、そこで、この部屋は落着きがないとか、この部屋はどうだとか、批判をされる、幼稚園の先生は不満に思うでしょう。

これは当然であって、もっと長い流れの中でみてもらわなければ、とても理解されないだろうと思うし、また、その流れの中で、しかも子どもの精神生活の内面において、それを私も理解していく時には、その時に今度はどうしたらいいかという「ちえ」がおのずから出てくるものだろうと思います。

先ほど、めちゃくちゃ書きという錯画の段階の話をしました。が、美術教育というのはけっして、美術にかぎった教育ではありませんで、子ども時代の教育の一般的な問題にふれていくわけでありまして、それは、芸術のみの教育ではないし、また、芸術家の教育ではありません。そこに錯画の段階というのがあるように、音楽の段階でも、錯画(画というものは適当ではないが)の段階というのがあるのではないかと、私、久しく疑問に思っていました。絵のことでありますと、子どもの中から出てくるものをばすとかいうようなことが非常にいわれてきましたし、またそのことの重要性が実地に示されているわけですが、音楽ということ、いつでもすでにできあがったものを与える、というように考えや

すい。

しかし、錯画に相当するものを、これからもなお、研究していく必要があるのではないのでしょうか。それがどういうものであるか、私ははっきりと知りません。おそらく子どもの内面に満足を与え、しかも、おとなも子どももその中で何か共通に理解できるものができ、また、共通に楽しむことができるようなものであろうかと思えます。

私も、子どもが、人間として成長し、発達していくのに役立つような教育をするにはどうしたらいいか、それをいっしょにけんめい考えていかなければならないので、それをやるには、理解をこえて、共通にお互いに感じることができ、お互いにそこでふれあっていくことができるような教育が必要であり、音楽の面でも、同様であらうと思えます。

私も、保育の中にある音楽の要素をしっかりと理解し、またそれを、子どもの全人的な発達に役立つような方向ですすめていかなければならないものであると思います。

(四十五年七月二十八日・コダワイシステム研究会の講演より)

## 手先の動きと子どもの感情 ⑨

清水エミ子

### 一、ひとりでいられる空間での手先の行動

子どもたちがよろこんであそび出している時や、積極的にあそびに参加している時のようすをじっとみつめてみると、広い部屋のすみであったり、置いてある物によってできたくぼみ、(観祭台と机の間、ピアノのうしろ)というように、自分たちでみつけた、開拓した場所、自分たちが創造して生み出した安定できる空間であることが多い。

この自分たちの作った空間は、ひとりひとりが自分で活動できる場所であり、安心して、おちついて活動に参加し展開できる場所だから、せまくてもかっこうがわるくても、少々動きにくくても、生き生きとあそび、活動しているのではないだろうか。

こんなことに気づいて、このくぼみの中でひとりである時の手先の反応をみつめてみると、グループや集団で活動している時の手先の反応と、ちがっていることに気づいた。

これにも個人でのちがいはあるが、大半がひとりでくぼみにいる時のほうが、すなおに、大たんに、手先が動いているのだ。今まで集団やグループの中でみていた時とちがう大たんさが発見されたのだ。これは、やはり、安定と自信とが、手先に反応しているのだと思われる。ひとりで、不安でなく、安定していられる空間での手先は、その子どもの心のおくにひそんでいる可能性を表わしているのだと思う。

子どもたちの可能性がすなおに手先に表われる時、安定し、大たんになるのではないだろうか。このくぼみの中では、手先といっしょに、声も大たんに表われてくるようだ。

こんなようすをみてみると、子どもたちにいるいろいろの空間、くぼみが、自分たちの手で、考えて創り出せるように環境をととのえておかなくてはと、つくづく感じるのだ。



例① 積木のかこいの中での手先と、保育室の机にすわっている時の手先のちがいを

④ホールで中型箱積木をつかって、食堂をつくって六名がいっしょにあそんでいた。

ゆたか、ひでお、ひろあきの三人が、いくつかに区切られた一区切りの中で、積木をなおしたりしていた。その時のゆたかの指先は、

・友だちのさそいで行動し積木を持つとする時は、安心しながらも、その一部にきんちようが加わっている反応のようだった。(写真1)

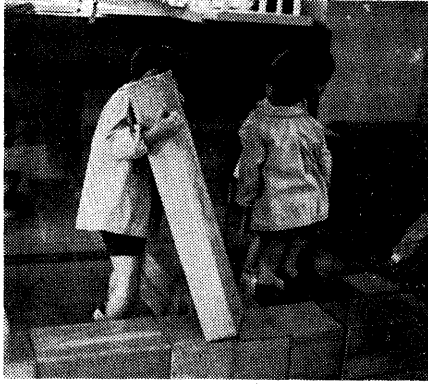


写真 1

「ゆたかちゃん、そこは、もつとでかい積木にしたほうがいいよ。たおれるといけないからさ。あつちのもつてきてやってよ」と(ひろあきに)いわれて「うん、いいよ」と答えて、大きな直方体の

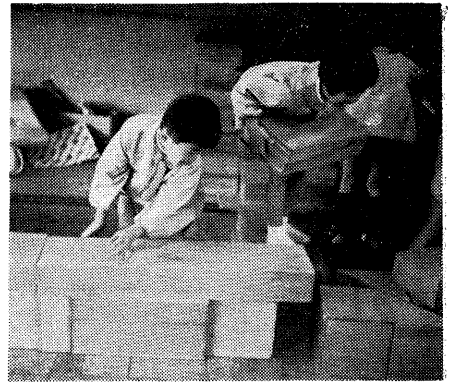


写真 2

積木を持ちこぼうとした時の指先は、  
・積木にさわろうとする時に指先に力が入っていた。(写真2)

写

・積木を持ってしまつてからの指先はゆるやかに安定し、力をぬいて持ち、積木をもてあそんでいるような表われであったのだ。(写真3)

写真 3

しばらく三名はいろいろな想像をたのしんでいたが、ゆたかをのこし、他のふたりは外に出してしまった。

ひとりで積木のかこいの中にいた時の

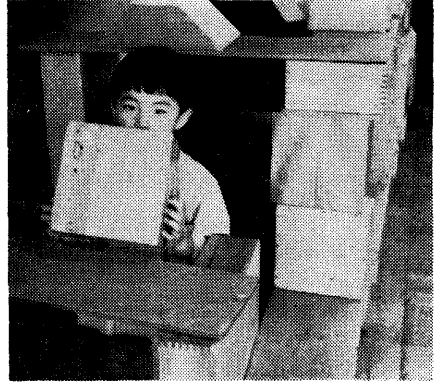


写真 4

ゆたかの指先の反応は、

まずひとりで、ブツブツ何かをつぶやきながら、一見たのしそうなのだが、指先全体に力が入っていて、積木をおしたり、たおしたりしてしまっていた。

積木をたおしたあ

と、おとしたあとに、ゆたかは右手の中指、薬指、小指の三本を、チョコチョコとうごかして、そのしっばいをまぎらせたり、カバーしたりしていたようだった。(写真4)

一回目の時はぐうぜんの指の動きかかと思ってみていたのだが、その後、数回、おなじように積木をたおしたり、おとしたりした後も、同じように右手の中指、薬指、小指は手のひらの方にゆるくチョコチョコと動いていた。このようすをみていて、

・二名の友だちがいなくなったコーナーにひとりのこった不安が、このような指先の反応に表われているのではないかと思わ

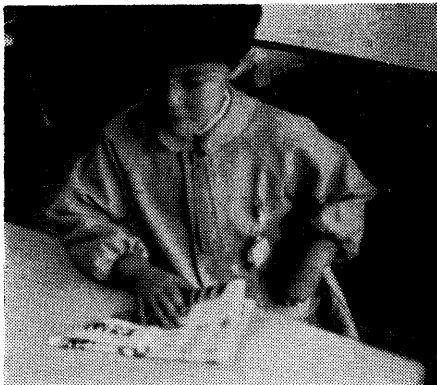


写真 6

積木のコーナーでの指先とは、全くちがっていることを発見したのだ。

・上衣のボタンを意味なくくるくるいじりまわしていた。

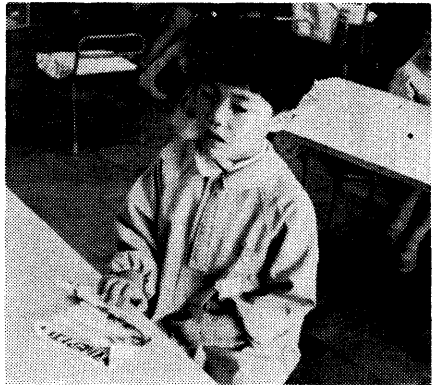


写真 5

次の日、ゆたかは、他の友だち大半が園庭に出てあそんでいるのに、保育室の自分の席にすわり、広告の紙で何かを折ったり切ったりしていた。作り終わって、自分の引出しに作品をしまい、また座席にもどってイスにすわった。その時のゆたかの指先、手のひらは、前日の



写真 7

(この時手先の動きのスピードは早いほうだった) 顔の表情をみたが、大へん平靜な顔をしていた。

(写真5)

・次に上衣のポケットの左の上の部分(先端)を左の人さし指のはらで、往復なぜをしていた。

ここで、私は、ゆたかに声をかけてみた。  
「ゆたかくん、どうしたの」とゆっくり顔をのぞきこんだ。すると、

「あのね、外に出てもいいかなってかんがえてたの、どうしようか？」と自分で自分の行動をきめかね、はんだんにまよっていたことがわかった。

「みんな外でナワトビしてるみたいね。ゆたかくんもナワトビ持っていつてごらんさい」と、園庭に遊びに出ることを示してみた。

「うん、そうだね」とゆたかは答え、ナワトビを自分のロッカーに取りに行った。

・この時のナワトビを取り出す指先は、今までのとは全くちがいで、手のひらに、ガッチリとナワトビのにぎりをつかみ、くぎからはずしていた。ゆたかの指先は、はつきりとまどいを表わしていてくれたし、心のじょうたいと、変化、移り変わりをはつきりと表現してくれていたのではないだろうか。

この二、三の変化の流れの間、顔での、体全体での表われは、あまりちがっていなかったのだ。(ちがいが表に表われにくくなっていた) ゆたかをみていて私は、手先や、手のひらでの表われは、体全体よりも早く、そしてくわしく心の動き、変化の移りかわりをつたえてくれるのだなあ、おどろきを感じたのだ。

(写真6)

この時は、やや口もとがゆるんでいるかなと思われる表情だったのだ。

・次は、両手のひらで、上衣のすそをにぎったりはなしたり、(にぎにぎ)していたのだ。(写真7)

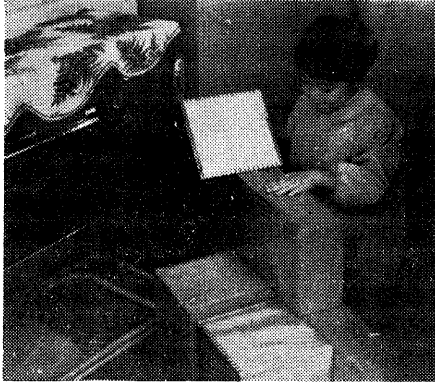
この時のにぎり方は、指先に大分力がこめられており、人さし指の第一、第二関節から特に神経質にビクビクと動かしていたのだ。この時になってはじめてゆたかの顔に、きんちょうが表われた。室内をきよきよろみまわしはじめた。みまわしながらも、上衣のすそをにぎる動作は止まっていなかった。



写 真 8

次の日の自由な活動の時、

ホールのすみにおいてあるピアノのうしろに、中型箱積木を持ち出して、かこいを作っていた。ゆたかひとりが入り込める位のかいなのだ。(写真8)



写 真 9

作ってしまったゆたかは、何をすると目的もないらしく、中にすわり込んでここにこしていた。前日の積木コーナーでのひとりぼっちの時とは、全くちがっていたのだ。手先には、力は全く入

っておらず、ゆったりと積木の面におかれ、時々、その面を、手のひらでなぞっていた。(写真9)

次には、たいこでもたたくように両手で交互に積木の面をたたき出した。昨日のゆたかの手先には、みることもできなかったほどのしなやかさで動いていた。安心してゐるのだなど、このようすからうかがわれたのだ。きちんとすわりなおしたゆたかは、相変わらずらくに積木をたたきながら、

「いいゆたな、ハハハン、いいゆたな、ハハハン」とうたってから、手をにぎりしめて、

ひとりで積木の中で笑いころげていた。くりかえしくりかえし歌っているうちに、ポケットからハンカチーフを取り出し、四つにきちんとたたみなおし、頭の上のせてひとときわ大声で「いいゆたな……」と歌っていた。

・ゆるやかに自然のじょうたいでまげられた指は、全くの解放を表現していたのだ。ひとりが入り込んだ積木のかいの中で、ゆたかは、ゆっくり解放感を味わっていたのではないだろうか。

このようすをみつめていて、私は若かった頃の自分を思い出した。このような時、

「ひとりで、そんなところでなにしているの？ みんな外であそんでいるわよ、ゆたかさんもいってごらんさいよ」といっていたのではなかったか。

交わりを豊かにし、友だち関係を正しく身につけさせることが集団生活をたのしくおくらせることなのだ、思い込み、みんなのいる所へ、グループへ、戸外へ、と子どもたちをおいたてていた時があったと、全身がカーッとあつくなり、はずかしさや子どもたちへの申しわけなきで体がこわばれるのを感じたのだ。

今のゆたかのように、

・自分で作りだした自分の空間で、自分の思いのままに過ごす一時の大切さを、

・自分で入りこむかこいの中での安定した一時を過ごすことの大切さを、

・自分でみつけたり、作った空間に入っている時の心のやすまりを、

指先の表われからこんなにもはつきり知らされたことはなかったのだ。「ゆたかくん、いいきもちそうね、いいゆなのね」とこどばをかけたとき、ゆたかは、チョコツとくびをたてにふって「キヤーみられたか」と手のひらをあたまに持っていたのだ。ゆつくりと、安心した指先と手のひらだった。

例② イスとオルガンで作った空間であそんでいる時の指先と、ままごとを友だちとしている時の指先のちがい

㊦ 保育室のママゴトコーナーで、いくこ、さゆり、まりこ、



たくじ、の女三名、

男一名が木の葉などをつかってままごとをしていた。いくこ

10 真 そびでは、あそびをリードすることを

写 好み、自分のベースで皆をあそばせる傾向の強い子なのだ。

11 真 そのため、あまりあそびの中できんちょうなくあそべる子どもと今まで観察をしていたし、いくこも、体全体での表われではたのしそくに、くるくと動きまわっていたのだ。(写真

10)

・しかし、いくこ



写真 12

がお母さんになり、ごはんのしたくをするようになった時、

・ままごとどうぐに向かったいくこの指先は体全体、特に顔の表われとは全くちがったきんちょうの表現をみせたのだ。

・「きょうのごはんは、まぜごはんよ」と声や顔の表われは平素とかわっていないが、おちゃわんをつまむ指先と手のひらはこちこちになっている。(写真11)

特に人さし指とおや指に力が入りすぎ、遊具をつまんでいた。

ごちそうができたがり、友だちにたべさせる時の友だちへの合図にも、きんちょうの表われがみえたのだ。

「さゆりちゃん、はい、これあんたのごはんなのよ」と、さゆりのひぎをたたいて

の合図に、いくこの手のひらに、チラリときんちょうがみえた。手全体に力が入り、ピシャピシャとたたいていた。(写真12)

「いたないいくちゃん、もつとそつとしなさいよ」とい

われて、こまった顔をしていたのだ。こんなようすをみていて、

子どもたちが、今、なかよくあそんでいたのにけんかになる時がよくある。そんな時は、今のいくときゆりのようないきちが原因なのではないだろうかどきづいたのだ。体全体での表情は

いつもどちがっていない。しかし手先や手のひらがちがっているため、相手にはよく通じず、「ぶった」と理解されてしまうし、「いたいなあー」といわれてしまう。自分は、ぶったのではない

から、「ぶたないよ、おしえたんでしょ」「ちがう、ぶった」ということで、あらそいになってしまうのではないだろうか。友だちに手先の反応がつたわっていれば、けんかにならず、いきちがいもおこらないのにとつくづく感じ、私は、

「さゆりちゃん、いくこちゃんがね、これさゆりちゃんよ、って合図をちゃんとしようとおもったら、ちからがいっぱい入っちゃったらしいのよ。そうねいくこちゃん」と、遊びがつづかれるようにと思つて声をかけてみた。「フーン、でもそつとでもわかるよ」「うん、ごめんね」これで、難なく遊びはつづいて

ったのだ。私たち保育者は、このように子どもひとりひとりの心をまちがいなくとらえ、つたわりにくいとき正しくつたえる手助けをすべきだとつくづく感じたのだ。

心を正しくよみとることは、子どもの心の表われを正しくよみとることを身につけなくてはできない。心を正しくよみとること



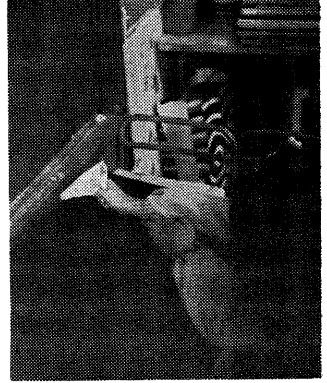


写真 13

は、子どもたちの体のすみずみをみつめ、表われをみおとさないことではないだろうか。一番すなおに心が表われてくるところをつかむこと、その表われの特色をを理解すること

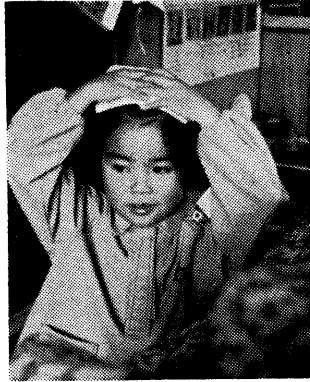


写真 14

とが大切なのだといふことさゆりのあらそいをみてつくづく感じた。

その日のおべんとオルガンのかけで、ごそごそおとがしていたのでいってみた。

いくこが、オルガンのよこに子どもの

イスを持って来て、かこっているのだ。自分は中に入り込んでいく。「たくちゃん、もう二個ここにイスやってくれる」と、近くでボンヤリしていたたくじにたのんでいた。かこい終わっていたくこは、オルガンのふたをあけ、オルガンのイスにすわって、オルガンをひきはじめていた。でたらめなうたを、口からでまかせを、ゆっくり一流の歌手になったような顔をしてうたい、ひいているのだ。ゆびはしなやかに、オルガンの上を、いったりきたりして、不協和音をかなでていた。手くびまで力がぬけ、だらりとして解放されていた。

しばらくひいてあきたのか、オルガンのうしろにしゃがみこみ、オルガンのイスを台に、ハンカチで何やら折り出していた。三角に小さく折ってピストルのまねをしていた。(写真13 14 15)

手先、指先には、何にも力が入っておらず、らくにハンカチーフをわしづかみにしていた。イスの背中をさわる指先もらくだった。このいくこをみていると、

・自分で作った空間にポッコリ入り込んで安定し、自分の世界をたのしんでいたのだ。いくこが、自分の力で開拓して作り出した空間、かこいの中の安定は、心の安定と結びついていると思う。

自分で作った、ぐうぜんできた、かこいや空間を大切にみまもり、その安定の場での指先の動きをみつめ、その子の安定のしかたを正しくよみとる助けにではなくてはとつくづく感じたのだ。

清水エミ子氏  
「手先の動きと  
子どもの感情」  
について

立川多恵子

子どもとの確かな心のつながりを持ちたい。これは母親のねがいでもあり、保育者のねがいでもある。

子どもが幼い場合は、自分の意思を他に伝える言葉を知らないし、自分の感情を言葉で表現することができる年齢になると、かえって意に反した形の伝達をするようになる。そうになると、時には、その言葉にまどわされ、子どもの心の深部のなやみや、要求をつぶさに理解することが困難になる。

清水先生が、子どもたちの手、子ども

たちの指先が、保育者にいろいろなことがらを語りかけてくれるということを見されたのは、ご自分の幼稚園に精神薄弱児・盲・聾啞児をかかえ、その保育に真剣にとりくまれた経験からも生み出された貴重な産物である。(幼児の教育第六十九巻五月号～十一月号に掲載)

十月のある日、私たちは、お茶の水女子大学付属幼稚園の一隅にある保育研究室で、清水先生をかこんで「子どもの手先の動きと、子どもの感情」について、座談会を持った。

先生は、開口一番、「今後、どんな方法で、この研究を進展させていこうか、思案中です。今、一つの方向として、もう少し、実験的な試みをふやしていきたいと考えています。私が最近気がつき始めたことは、あるできごとと直面した子どもの手先の動きが、早生まれの子どもと、遅生まれの子どもとでは、どこかちがうということです。そこに何かあると思うのです。例えば、早生まれの子の手や、指先の動きは率直だけど、遅生まれ

の子どもの場合、一瞬おくれて行動が起る感じですよ」

清水先生の幼稚園は、一年保育のみである。年齢差の少ない集団の中でも、かつ、子どもの手、指先の動きから、指導効果のもっとも上がる年齢が、どの段階にあるかをさぐりあてようとしていらっしやる。

近頃、私も先生のご研究に少なからず興味を持ち、訪問先の幼稚園で、しばしば園児の手や、指先を見る。

しかし、残念ながら、子どもの手や、指先が、今、何を語っているのかわからないことが多い。

第一、よほど心がけないと、日頃の習性で手もとより先に、顔の表情を見てしまふ。

「手の動きは、顔の表情より早い」という先生のご意見からおしはかると、顔を見て、それから、おもむろに手もとを見るのでは、手や指先の動きは、すでに第二段階に入っているわけである。

幼稚園児の場合、手の動きをほとんど

ど、読みとることができなかつたので、（私の子どもの場合、どうか）と考え、ある日、二人の姉妹の手もとをいっしょうけんめい見つけた。

おもしろいことに、自分の子どもの場合その手の表情をよみ取ることができ、テレビをみている子どもの指先だけ見ている、クライマックスがわかる。

おはじきをしている手も、使わない左手が、素直に、「できるかな」「お姉ちゃんに負けたくない」「今度こそがんばろう」など、固くなった指先で、さまざまなことを語っている。

子どもの手もとの動きを読みとるためには子どもの日頃の生活を知っていなければならぬのだろうか。それも、きわめて、しっかりと把握した上でないと読みとることができないとしたら、今のところこの方法で、子どもの心理状態を知ることのできるの、ベテランの保育者か、母親だけだということになる。

教員養成を仕事にしている私としては、清水先生のご研究が、将来は、経験

の浅い保育者の、子ども理解のための一つの便利な方法として、一般化していくことができたらいとお考える。

「こんな子どもは、こんな時、こんな手の動きをする。それはこんな意味を持っている」手の動きは、同じ場面であっても、その子どもの年齢、性、性格によつて、それぞれが違った表現をするに違いない。外向的な子どもの動きには、どんな特徴があるだろうか、内向的な子どもの場合はどうだろうか。こう考えていくと、相当たくさん事例を集める必要がある。

清水先生も、会の席上で、協力者を求めていらつしやう。

多くの資料を集めている間に、いくつかの傾向が浮かび上がり、系統化できるようになつたら、保育者も、母親も、子どもの動作や、顔の表情に合わせて、子どもの手もとの動きを観察して、的確にその心理状態をとらえ、適切な助言をしてやることができよう。

会の最後に「われわれはとかく仕事を

系統化しなくなるのだが、この研究は清水先生らしくてよいと思うので、あまりまとめることばかり考えず、いろいろな場面を集めるとよいだろう」と話し合つた。

なるほど、私たちは、清水先生に早くまとめて欲しいとねがい、先生も結論を急がれるとかえつて危険であり、その上、先生のお仕事特有の味を失うことになるかもしれない。清水先生の研究のすばらしさは、なんといっても、先生の子どもの心を理解していこうとするたゆまざる努力が「子どもたちの手もとの動きさえ見のがさなかつた」ということにある。先生の保育の緻密さが、とうとう子どもの手や指先の表情という細部の観察に及んだことに敬意を表したい。

会の中で、先生は、子どもの手・指先の動きのよみを言葉の不自由な子どもたちの保育に大いに役立てたいと話されていたが、これこそ、先生のご研究のもつとも生きるところと考え、今後のご活躍を期待する。

# 遊べない子と現代の幼稚園

## (3) 日本伝承遊びへの招待

有 木 昭 久



ジャンケンというものには、不思議な魅力がある。四歳くらいの子とおとなとジャンケンをしても対等にできる。力の強い子と弱い子、大学生と小学生だって同じことができる。だからジャンケンをつかったゲームが多いのもうなずける。私たちの子どもの頃にも、ジャンケンをつかったゲーム

がたいへん多かった。楽しい思い出が多い。サッカーや野球も結構である。男の子であれば一度は熱にうかされるものだ。近ごろあやとりがはやってきているというのも嬉しいことである。先日冬のさなか、オリエンテリングに子どもたちをつれていったとき、女の子たちがあやとりをしているので、いっしょにやってみたが、意外とたくさん知っているので、びっくりもし、楽しくなった。

お母さんや先生たちが子どもに伝えられる遊びはまだたくさんある。現代ということばにまどわされて、昔の子ど

もと今の子どもがまるでちがうと考えては、かわいそうである。子どもたちは、もうおとなに期待するものがない、というだけでは寂しいばかりである。おとなは、がんばらなくてはいけない。

伝承されてきた遊びをふりかえって、現代に再創造しようという私たち研究所の意図は、遊びそのものもっているおもしろさを再発見することにある。おとなになった私たちを、今なお夢中にさせるものがあるからこそ、それが何であるかをさがしあて、多くの人に伝達したいと願う。

民話と同じことがいえる。私たちは民話にひかれるし、日本を考え、未来をさぐる一つのでだてである。民衆の知恵として、伝えられてきた遊びをふりかえり、現代に新しく生かすこと、これは、容易ではないが、今日に生きる者にとつて、大切なことと私たちは考えている。

## (一) いろいろ遊び

まさにいろいろ遊びで、かなりの種類のものがあるが、代表的なものだけをとりあげてみよう。

この遊びは、ジャンケンによって、一番勝ったものが親となり、順次、後は子の1、子の2……となり一番負けたものが鬼となる。このように、親と子と鬼の三者に分かれ、親を長く獲得しつづける遊びである。鬼は、自分の好きな遊びを決めることができるが、続けて同じ遊びは行なえない。遊びの中で、アウトになったものは集まって、ジャンケンをする。一番まけたものが鬼となり、遊びがまた始まる。もし親がアウトで、子の1が残った場合には、子の1が新しい親となる。

このいろいろ遊びには、**④**比較的子や鬼に有利なもの、**⑤**親に有利なものに分けることができる。

### ④子や鬼に有利なもの

#### ①反対信号 (①図参照)

鬼を中心に円をつくり、鬼が「歩け」と命令したら一斉に止まり、「右向け」といったら「左向」になり、「両手おろして」といったら両手をあげる。このように鬼が命令したことで反対のを行なうのがこの遊びである。もしも一回

目で誰も間違えなかったら、何回行なってもよいし、一人でも二人でも間違えたりした人がいたら途中でやめてもよいし、最後までねばって全員間違えるまで頑張って親を獲得してもよい。

「おじいさんすわって」とリーダーがいえばおじいさんは立ち、「おばあさん立たないで」といえば、おばあさんは立つというような遊びと同じである。

#### ②あひるの足とつかえ (②図参照)

鬼を中心として円をつくり、鬼のまわりを片足で跳んで、鬼が見ていない時に足をとりかえる。鬼は、足を動かさずに、首だけを動かして、とりかえたところを見つける。見つけたら円の外にでて待っている。鬼が「やめた」と宣言するまで、遊びは続けられる。見つかってしまったメンバー同士でジャンケンをして新しい鬼を決める。鬼と子のかけひきがスリルをよび、鬼がいじわるをして皆がダウンするまで、続けて親をとったりすることもできる。しかしあまりしつこくやっていると子どもたちがぶつぶつ言いますから、いい加減なところで、たいていはやめになる。

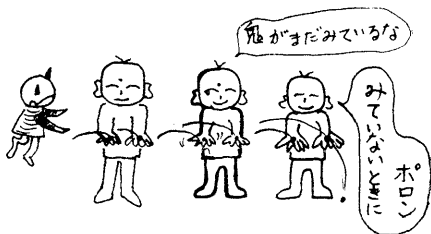
#### ③おじぞうさん (③図参照)

親も子も一列になって、おじぞうさんのように立つ。そして両手を前にさしだし、鬼が、おそなえ(小石)を置くのを待っている。鬼は、すばやく小石を一つずつ手のひらに乗せ

① 図 反対信号



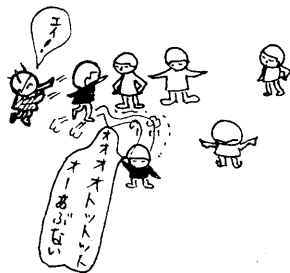
③ 図 おじぞうさん



② 図 あひるの足とつかえ



④ 図 お人形さん



ていく。おじぞうさんたちは、鬼が見ていない間に大急ぎで手をひっくり返して、小石を落とす。鬼は、落とした瞬間を見つめる。鬼は三つ〜五つ位まで石を乗せていくが、最後まで一つも石を落とせなかったおじぞうさんと、石を落とす時に鬼に見つかってしまったおじぞうさんがアウトになる。

④ お人形さん (④ 図参照)

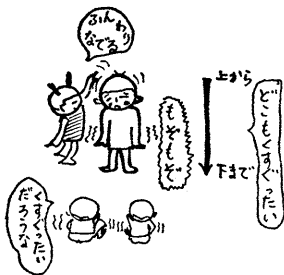
好きな所に親も子も立つ。お人形さんのように、かわいらしくかっこうよく立つ。そこへ鬼がやってきて、このお人形さんたちを突き飛ばしながら鬼は人形たちを近くに集める。この遊びは、押された人形が他の人形にあたったら、アウトになる。だから、押された人間は、ぶつからないように身をよじってよけるが、このようすがあまりにも愉快なので笑ってしまふ。

年少児には少しむずかしいので、次のような「お人形さん」という遊びをした後、やってみるのもいいでしょう。

「夜になってね、お人形さんたちが踊りをおどったり走ったりいろいろなことをするんだよ、でもね、狼がやってきたらすぐもとのお人形さんに戻らないと、人間のように笑ったり動いたりすると食べられちゃうから、気をつけてね」

こうして先生が狼となってホールの隅に待機する。お人形さんたちは一斉にホールいっぱいにかけまわる。突然、狼が「ウォーッ」と吠えるとき、すぐ、子どもたちは、ウォーッと



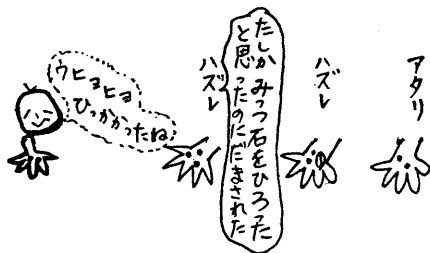


⑥図 あひるのゆうびん屋さん

⑥図 りんごの皮むき



⑦図 あひるの遠足



いった瞬間にその動作をやめる。何とも可愛い愉快な人形  
 ができる。

狼は人間じゃないとわかったら引き上げる。すると、ま  
 た、子どもたちは一斉に動きまわり、このような繰り返しで  
 遊ぶ。またあまり笑わなかったら、先生がおもしろい顔をして  
 あげてください。きつと笑い出しますから……笑ったり動  
 いたりした子は先生といっしょに狼になってやりましょう。

⑤ものづくし(やさしい、くだもの、車の名、虫等) ⑤図  
 鬼は⑤図のように片足を出して待つ。鬼が「やさしい」と宣  
 言すれば、やさしいの名前を言わなければ、鬼の所を通過する  
 ことはできない。これを通る前に、鬼は十かぞえて、最  
 後の考えるチャンスを与える。一回目はたいていすんなり通  
 れるが、二回、三回目になるとなかなかきびしい。ですから  
 通過したらすぐ考え始める、しかし考えたものが、前に一度  
 であり、また、せっかいいのを考えついてもすぐ前の人に  
 言われてしまつてアウトになることがたびたびある。

⑥りんごの皮むき(⑥図参照)

親から順に鬼の前に立つて、鬼がりんごの皮をむくように  
 頭のとっぺんから順に下までさわっていく、その間、一回も  
 笑わないでいられたら合格。

何しろ、くすぐったい箇所を通過するのだから、こらえる  
 のは大変なことである。顔が真赤になるものだから、見えて



みやすきから、いろいろな遊びに展開されていく。

### ⑨ ジャンケン のいろいろ (⑨ 図参照)

普通手で行なわれる三すくみのジャンケンの他に、舌、腕、足、言葉で行なうジャンケンもある。

これらのジャンケンを使用してまた新しい遊びも考えられる。例えば、縦に二チームに分かれ⑨ 図の4を行なう。負けた人は、その格好で、自分たちのチームの後へ引き下がる。苦しいけれども、腕と腹筋の運動になる。

### ⑩ ジャンケン遊び

ジャンケンの中には、さきに述べたように三すくみをそのまま使って遊ぶものと、グー、チョキ、パーの形をうまく変



化させ、同じものを出した時に勝負が決定するものがある。

① 天下とりジャンケンは、この二つをミックスしたりして新しいジャンケン遊びを形成している。歩く、跳ぶことを中心とした② 歩きジャンケンや、ジャンケンの前後に、動作や歌や言葉を入れて遊ぶ③ リズムジャンケンや、絵を書いたりする④ 絵あそびジャンケンや、特に集団の方がおもしろい⑤ チームジャンケンなども、これらすべて普通のジャンケンをうまくとり入れたものといえるだろう。

順に従ってその遊びの特徴をしるしておきたい。

### ① 天下とりジャンケン (王様と乞食) (⑩ 図参照)

ジャンケンの勝ち抜き戦をして、一番勝った人(王様)を先頭にして横に一列になって並ぶ。一番負けた人が乞食となつて下位の席の人とジャンケンをする。勝つたら次の人とジャンケンをし、負けたら負けた人の席に入る。勝つた人が次の人と勝負をする。このようにして、しだいに上位へ進んでいく。王様と対戦する時は、ていねいにおじぎをし、もしも忘れてしまったら「さがりおれ!」と一喝され、また下位からやりなおさねばならない。王様に勝つたら晴れて夢に見た王様になれる。負けた王様はあつという間に乞食になり、王様奪回に必死に立ち向かう。全員が王様になろうとしているのだから、熱気がこもってくる。王様は、三回く五回続けて挑戦者に勝てば家来をつくることのできる。

⑩ 図 天下とりジャンケン



家来のつくり方



家来の選び方は、王様を先頭にして、縦に好きな所に一列に並ぶ。王様は後を見ないので、「前から二番目」などと指定をする。そうしてその番号の所にいた者が家来となって、また最初から始められる。今度は、家来の所でもあいぎつをしななければならない。こうして天下とりはあきるまで何時間も続く。

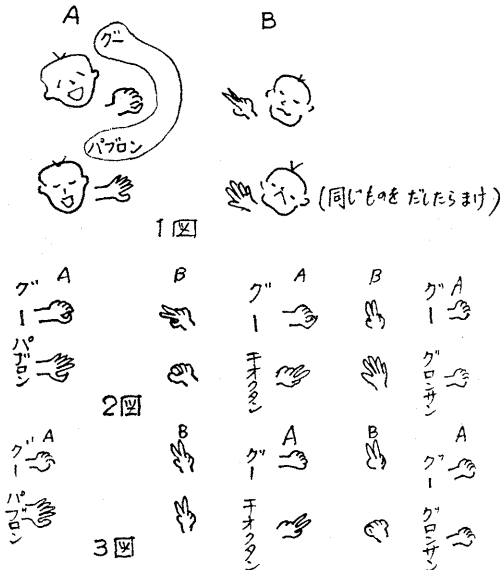
ジャンケンの方法は、普通のジャンケンポンで勝った者が次へ進むというのが一番簡単で、幼児は喜んでやる。就学前

の子どもたちなら、次のようなジャンケンでもけっこうできるので、紹介しておく。

② 「パー パブロン」 (⑪ 図)

グーはグロンサン、チョキはチオクタン、パーはパブロン (ハイシー) パンシロンこれは、テレビのC・Mで有名な薬の名である。二人が向かい合わせになってジャンケンをし、勝った方からいう権利ができる。AがパーでBがグーだったら、Aから「パー、チオクタン、または、パー、パブロン、

⑪ 図



または、バー、グロンサン」という。1図のように、BはAがいった同じものを出したら負けとなり、Bが、同じものを出さずに2図のように出した時は、もう一度Aがいう権利がある。ですから拳の形が勝っている時は何回でもいえるわけである。Bという権利ができる時は3図のような時である。だんだんなれると早くなりおもしろくなる。

③ 「グッスイ(ケンカン)、ハワイ、チッキ(チョウセン)」  
 まずジャンケンで先手を決めたら好きな拳を大きな声でいう。「グッスイ」とやったとき、相手と同じものを出したら勝ち、違うものを出したら、すぐ今度は相手の番になる。これを交互に早く繰り返す。

④ 「パタパタパット、チキチキチッキ、グトグトグット」

(12図-1参照)

まず先手を決めて勝った方から、手をリズムにあわせて二回振って行なう。バーで勝った人は、「パタパタ(グット、チッキ、パット、好きなもの)」という。この時、相手と同じものを出したら勝ちになる。違うものを出したら相手の番になり、リズムに合わせてたたかう。

⑤ 「だせだせ チョッと出せ」(12図-2)

これは互いに腕を組んで行なうものである。先手を決め、勝った方から、いかめしく、腕をくんで「出せ出せ、パッ(グッ・チョツ)」と出せ」と大きな声で唱える。相手が同じ

12図 1 2 3



ものを出したら勝ち、違うものを出したら相手の番になり競う。しかしどういうわけか、これは、いわれたものを思わず出してしまふから愉快だ。出すまいと思っても、手の方がいうことをきかないから不思議だ。

⑥ 「グーでどうだ」

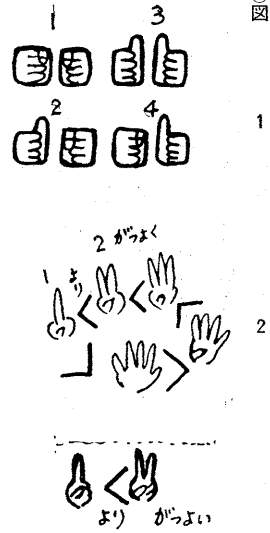
先手を決め、勝った方から気合いをこめて、「グー(チョー、バー)でどうだ」と大きな声で唱える。相手と同じものを出したら、もう一度、唱える。二回続けて同じものを相手が出したら始めて勝ちとなる。これは一回だけ勝つてもだめなのでなかなか大変だ。人数が少ない時には適している。

⑦ 両手ジャンケン(12図-3)

向かい合って両手を出してジャンケンをする。鏡の中のようと同じサイドの手で勝負がきまるが、両方とも勝たないともう一度勝負をする。

⑧ ヒビトイトイ(13図-1)

⑬ 図



ニュージランドの原住民のマオリ族の指の遊びだが、ジャンケン遊びによく似ているのでしるしておく。二人が向かい合って、乞食の方から「イー、ヒビトイトイ」というと同時に、13 図-1 のような四つの型の一つだけを出す。相手が同じものを出したら勝ちになる。違うものを出したら今度は相手の番で「イー、ヒビトイトイ」とやる。2 と 4 の場合は、左右反対で、鏡の中のように同じサイドの指で決まる。

⑨ エーイ、ヤ (⑬ 図-2)

これは⑬ 図-2 のように指一本は二本に負ける、二本は三本に、三本は四本に、四本は五本に、五本は一本に負けるという約束の指あそびである。二人で「エーイ、ヤ」のかけ声をだす。一本と三本であったらもう一度やる。一本違いの時だけ勝負が決まるが、気合いがかかっているものだ。

「きょうの運だめし」「ジャンケン汽車ポッポ」「カードとりジャンケン」「ドンチャッチジャンケン」も、一人だけが

天下になる、楽しい天下とり遊びである。

◎ ジャンケン遊び

① ジャンケン歩き (⑭ 図参照)

駅、ビル、家の階段などで、上と下とに別かれてジャンケンをし、のぼったり降りたりする遊びをよく見かける。これもうまくジャンケンを使った遊びの一つだ。

② ジャンケン背おい

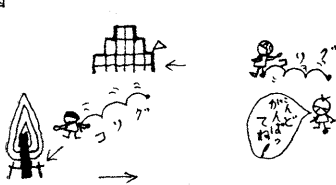
⑭ 図



⑮ 図



⑯ 図





ジャンケンをして勝った方がおぶさる。グーで勝ったら五歩、チョキなら七歩、パーなら十歩というようにして、おぶいっこをする。足の運動にはとても適している。

### ③ 一步三步 (15 図)

鬼と子をジャンケンで決める。鬼は線から一步、子は線から三步とぶ。鬼と子は、二歩の差でスタートする。鬼と子とジャンケンをして勝った人が、目的地点に向かって一步ずつ跳ぶ。子は戻ってくるまでに、追い抜かれなかったら勝ちとなり、鬼が子を追い抜いたら、鬼の勝ちとなる。集団のときは、最初のジャンケンで親は五歩、子は三步、鬼は一步とぶ。親と鬼は一人ずつ、子は何人でもかまわない。二人の時間と同じように勝った人たちが一步ずつ進んで行く。これはいろいろ遊びの中でもよく行なわれる。

### ④ グリコ、チョコレート、パイナップル

二人でやる時は、ジャンケンをして勝った方がスタートラインから目的地向かって跳ぶ。グーで勝ったら、「グリコ」と唱えて三步跳び、チョキなら「チョコレート」六歩、パーなら「パイナップル」六歩と進む。さわってくる場所を決めて早く帰って来た人が勝ちとなる。さわってくる場所を二つにしたり、三つにしてもいい。

集団でやる時は、二人ずつ組になり、一人は、ジャンケンをする人、もう一人は跳ぶ人になる。ジャンケン組は、一斉

にジャンケンをして、もしもグーで勝ったら、大声で自分の仲間へ伝え、目的地まで行って帰ってきたらその人はジャンケンをする人と交替する。今までジャンケンをしていた人は、跳ぶ人になり、二人が一度ずつ早く往復したチームが勝ちとなる。

### ⑤ 一周ジャンケン歩き (17 図)

① 図のように好きなところに子どもは陣をつくり立つ、人数が多い時には、よく、「グーなしジャン」というジャンケンをする。これは、グーを出さずに他の拳を出さないということ、おのずと、チョキかパーを出さねばならないが、もちろんチョキを出した人が勝ちとなる。集団の時には、こんな方法がよく使われる。勝った人は、右に一つだけ移動できる、こうして早く一周して自分の陣まで来た人が勝ちとなる。

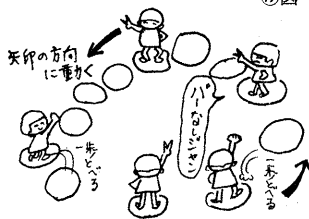
### ⑥ ジグザグジャンケン (18 図)

⑧ 図のように舂を書いて二人向かいあう。進む方向は図に従う。ジャンケンで勝った人は一つ進む、そして相手の陣地に入ったら勝ちとなる。舂を多くした時は、グーで勝ったら三步とか、規則をつくってもよいだろう。またずっと片足でやって途中足がついたら最初からやりなおしなどと決めてもいいだろう。

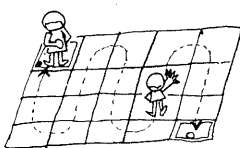
### ⑦ 逃げるが勝ち (19 図)

舂目をつくる。鬼と子をきめたら、鬼は追いかけて、子は逃

⑰図

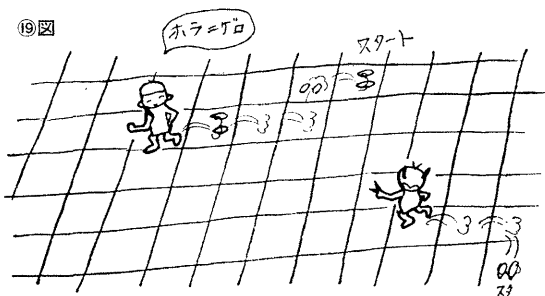


⑱図



ける、ジャンケンで勝った人は(グーは一步、パーは二歩、チョキは三步)というようにその数だけ進む。子は鬼から遠くの方へと進み、鬼は子の方へと近づく。鬼が子と同じ所までいったら鬼の勝ちとなる。なかなか鬼が子に追いつけなかつたら降参をしてもう一度やりなおしをする。

⑲図



⑱リズムジャンケン

①おちゃらか ホイ(20図)

せっせっせーのよいよい(向かいあって手をつなぎリズムに合わせて振る)

おちゃらか、おちゃらか、おちゃらかホイ(ホイのところ  
でジャンケン)

勝った人は次の歌をうたいながら⑳図-3の動作(「おちゃらか、かったよ、おちゃらかホイ」、負けた人は「おちゃらか、かまけたよ、おちゃらかホイ」、同じ拳の時は「おちゃらか、どうてん、おちゃらかホイ」)

ホイのところでは必ずジャンケンをして、「かったよ」「まけたよ」「どうてん」の動作をする。リズムに乗ると外から見ても楽しいものである。間違えて二人ともおじぎをしてゴツンゴツンする時もあるから御用心。ジャンケンの勝ち負けではなくて、間違わずに動作をすることで競う。

②山の上から(⑳図-1)山の奥から(㉑図-2)

㉑図

せっせーせーのよいよい



3

せーせーの  
よいよい



2

おちゃ  
ら





⑫図



ンを最後に入れたことによって楽しくなっている。

手合わせ歌の中に純粹に動作だけを間違わずに行なう「青山土手」、「うちのこんべとさん」、「たいのこたいのこ」「みこしどこいく」などもありますが、このように、最後にジャンケンを入れると楽しく展開できる。またなわとびでする「お嬢さんおはいり」などのように、ジャンケンを入れるとなお一層、ジャンケン遊びの範囲が広がっていく。

④花いちもんめ

これは代表的な、子取り遊びである。A、Bにわかれ交互に歩きながらいう

A ふるきとめて花いちもんめ

B ふるきとめて花いちもんめ

となりのおばさん ちよっとおいで

おにがこわくて いかれません

おかまかぶって ちよっとおいで

おかまないから いかれません

おふとんかぶって ちよっとおいで

おふとんないから いかれません

A あの子が欲しい B あの子じゃわからん

A この子が欲しい B この子じゃわからん

A そうだんしよう B そうしよう

輪になってだれが欲しいかを相談して決まったら

(A B いっしょに) きーまった

A ○○ちゃんが欲しい B ○○ちゃんが欲しい

指名された二人の子がジャンケンをする。勝ったら、相手

の子を自分たちの仲間に加え、勝った方のグループから、

勝ってうれしい花いちもんめ

負けてくやしい花いちもんめ

となりのおばさんちよっとおいで

……あとは先と同じようにくり返し、子をたくさんとっ

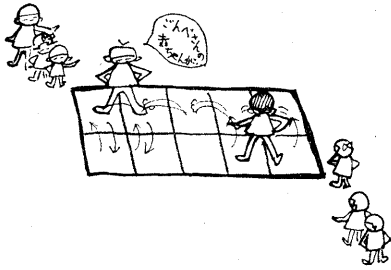
ていく楽しい遊びである。この遊びに使われるジャンケンは

足で行なう「大阪ジャンケン」が普通だが、腕ジャンケンと足ジャンケンを混ぜてやってもいいと思う。

### ⑤でしてしジャンケン

この遊びは、言葉と動作を間違わずにすばやくやり、相手を間違わせる遊びである。お互いにグーを出し二人いっしょに「でしてしてし」(、のところで好きな拳を出す)勝った人は、相手を指さし「あなたは「自分を指さし」わたしは「でしてという。負けた人は、反対に、自分を指さし」わたしは「あなたの」でして、同時に二人が言葉と動作をする。うまくできたらでしのところでまたジャンケンをして繰り返す。同じ拳であつたらまた、でしてと言う。なかなか思うようにいかない。「さぶちゃんは、てっちゃんのでし」などと、二人の名前でいい合うのもいいだろう。

②④



### ⑥ごんべさんの赤ちゃん

(②④)

この遊びは歌に合わせて舂の中を両足を開いたまま間違わずとびジャンケンで勝ち抜く運動量のある遊びである。二チームに分かれて行なう。

ごんべさんの(前にとびます)

赤ちゃんが(後へ下がると、陣をとる(陣どりジャンケン)がある。くふうしだいで、楽しいものがたくさんつくれる。

(横)た(横)それで(前)

あわてて(後)しっ(横)ぶ(横)した(横)

こうしてスタート地点に戻ったら「ゴンベサン」のかけ声でジャンケンをする。負けたら次の人と交替する。10〜12等分された円を回って行なう「あんたがたどこさ、ひごさ、さのところで一つ戻るこの遊びは、いちどに五人ほどできるのが魅力である。この歌を歌う時、さ、をいわないでやると一層変化に富む、最後にはジャンケンをするのだが、たいていの時は、途中で間違える人が続出するので残る人はほとんどいなくなってしまう。

### ⑦もしもしジャンケン

二チームに分かれ、もしもしかめよの歌に合わせて二人が右手でジャンケンをして四回行なう。勝った人は左手に持った新聞紙で相手の頭をたたく。四回のうち三回以上勝ったものが残って勝ち抜いていく。また、負けた人は「おもしろい顔をする」というように、表情遊びとして展開するのもいいでしょう。ヘボヌケジャンケンは大声で相手を圧倒するところがある。何といっても痛快だ。

### ⑧絵あそびジャンケン

この遊びは、絵や、形をつくったりする絵かきジャンケンと、陣をとる(陣どりジャンケン)がある。くふうしだいで、楽しいものがたくさんつくれる。

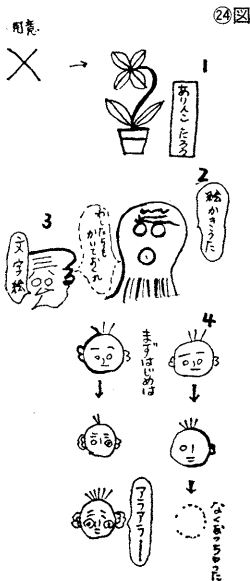
### ①花とりジャンケン (24図)

絵かきジャンケンの一つで、まず初めに×の形を各々かいておき、ふたりでジャンケンをして、勝った人がひと筆ずつかき加えて、早く花の絵をつくった人が勝ちという遊びである。24図-1が完成図です。

このように絵かきジャンケンは、略画や子ども好みの好きな、絵かき歌(たこ入道)……〔まるかいてまるかいてまるかいてちよん 大きなあたまにあらしゆしゆしゆ とうさんかあさんさようなら つばめが三羽とまっている〕、文字絵〔つる三は、まるまるむし〕等を使用するといくらでも遊べる。

### ②顔あげジャンケン (24図-4)

これも絵かきジャンケンで、まず図のように各々顔をかいておき、ジャンケンで勝った人が、「目をあげる」とか「毛をあげる」というようにして、全部なくなった人が勝ちとなります。これは、すぐ書いたり消したりできる石の上で、ろ



うせきを使ってやるといいでしょう。

### ③ジャンケン三角とり

四角い紙等に点をできるだけたくさん書いておき、二人でジャンケンをして、勝った人が線を一本引くことができる。こうして、点と点を結びながら、三角の形をたくさんつづけた人が勝ちとなる。自分がつくった三角には、自分の頭文字を入れる。

### ④ジャンケン陣とり

四角を書き、勝った人は、手をひろげて指の軌跡をろうせきでかいていき、四角を全部自分のものにしたものが勝ち。

### ⑤チームジャンケン

この遊びは、特に集団と集団でやった方がおもしろいものである。お互いが頑張らないとチームに迷惑をかけるので大変きびしくもある。

### ①うしろジャンケン (感覚ジャンケン)

背中に伝わった拳の形を正しく伝えることと、ジャンケンを、ミックスしてあるのがこの遊び。二チームに分かれ、横一列に並ぶ。両はしの人々が、まず自分で考えた拳を隣りの人の背中につける。感覚の鋭い人は、一回ですぐこの形はあの拳だと予想がつく。こうして、次から次へと他チームに悟られないように伝えて両チームとも最後尾へ行ったら、今伝



わった拳をジャンケンボンの合図で出す。勝敗は、両方とも正しく伝わって出した時は、普通のジャンケンのルールと同じだが、チームに一人でも間違ったものを出した人がいたら負けとなる、両チームとも間違った人がいたら引き分けとなり、もう一度やりなおしをする。少しむずかしいようだったが、人数を少なくして手で伝えあうのもいいでしょうし、電報のように口から耳へ伝えてやってもいいと思う。

#### ② ジャンケンブープー

チーム全員が、他チームよりも早くジャンケン勝ち終える遊び。各チームとも縦に一列に並び、チームごとに代表者一名を選んで十メートル位離れた所に、自分のチームとは違う列の前に立つ。用意ドンで各チームの先頭は走り、立っている人とジャンケンをする。走った人がジャンケンで勝ったら次の人と交替し、負けたら、「ブープー」といってもとへ戻り、勝つまでジャンケンをする。全員がはやくジャンケンに勝ったチームが勝ちとなる。この遊びは、通称「関所やぶり」と呼ばれている。勝った人は関所でお土産をもらい、負けた人は、皆の前ではずかしそうに「スイマセン」とか「シェー」の動作をするとか、関所を二人にするとか、いろいろくふうすれば、かなり遊べる。

#### ③ インディアンと騎兵隊

二チームに分かれ、一方が全員ジャンケンに負けたら勝負

が決まる。二つの陣を作り、勇ましくかけ声をかけて出発し、各々敵とジャンケンをする。ジャンケンで負けた人は、ただちに自分の陣へ引きあげ残っているものを応援する。こうして相手チームが全滅するまで、ジャンケンをする。勝ったチームは喜びの歓声をあげて敵の陣をまわる。そしてまた二回戦へと進む。

#### ④ 陣とりジャンケン

二チームに分かれ、合図によって両チームの先頭が、自分たちで決めた道を走り、二人が出合った所でジャンケンをする。勝った人は、そのまま進み、負けたチームは、ただちに、次の人がでて、また出合ったところでジャンケンをする。早く、相手の陣に入ったチームが勝ちとなる。うずまきジャンケンやへびジャンケンは陣とりジャンケンの一種。

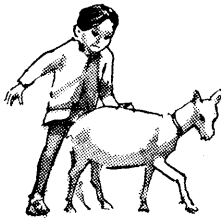
#### おわりに

三回にわたって、現代に生きる遊びについて書いてきたが、この中で一つでも二つでも、実際に使えるものがあれば幸いと思う。これからも幼児教育については、先生方といっしょに勉強していきたいと思っている。私たちの研究もまだ端緒にすぎないばかりで、これからますます実践と研究を深めていかなければならない。昔の遊び、これからの遊びについて、興味のある方、これからいっしょに手を携えて勉強していこうではありませんか。

(日本児童遊戯研究所)

## 幼 児 の 音 楽 に つ い て

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子  
和 文 治 り 真 美  
田 合 勢 守 田 満 寿  
本 堀 関 加 津 依  
司 会  
出席者



本田 コタレイシステムに興味を持っていらっしゃる加勢先生と、保育の実践の場にいらっしゃる幼稚園の先生方とごいっしょに、自由に話し合ってみたいと思うのですが、はじめに実践的な立場で毎日お子さまと生活をしていらっしゃる先生方から、保育の中で現在子ども音楽がどうなっているのか、お話を聞いていただけたらと思います。

関先生は三歳児のクラスをお持ちでいらっしゃいますし、幼稚園の生活がスタートしているところで、いかがですか。

関 専門的なことを専門的に身につけさせるのが目的ではありませんが、音楽というのは非常に大事なことで、年齢的にも大いに身につけさせたい時期だと思えます。音楽教育というと、先生の能力だけで一方的に方向づけることが多かったのではないかと思うのですが、子ど

もが自分から欲し、自分から選んでいっ

て、生活の中で身につけてほしいと考え

ています。今まではかくピアノを中心

にしていたことが多かったと思うのです

が、今度はレコードとか、遊んでいてい

っしょにうたをうたったりとかして、音

楽を生活の中で身につけてほしいと考え

ています。

**堀合** 音楽といっても幼稚園での幼児

の音楽は、音を出すのと身体を使うのが

いっしょなので、おとなが考える音楽と

は違い、実際していることはたいへん幅

が広いのです。身体を使うことが音楽の

基礎になり、リズムの基礎になり、両方

に共通のものとなるのではないでしょう

か。それでいてやはりうたもうたうし、

きくことも、楽器もするのです。

生活の中でしていくことは当然で、そ

の中でも今まではきくということ(鑑賞)

が幼稚園ではある程度むずかしいものと

されて、おとなの分野であるからなん

なくきかせればよいと考えていました

が、現代の社会に生活している子ども

ちには、きれいな美しい本当にいい音楽

を耳から入れるということが大切だと思

うのですが、音楽教育の面からももちろ

んそうですが、よい音楽をきくことが性

格にもひびくものを持っていると考えて

いかなければならないし、またこの意味

で大いに現代の幼児のためにとりいれて

いったらよいのではないかと思ひます。

**本田** 今二人の先生からうかがった毎

日の問題をきっかけに、いろいろのこと

を話し合ってみたいと思います。

**加勢** 一貫した音楽という観点でみ

て、お二人の先生のおっしゃった、子

ものあそびや生活の内容が具体的にはっ

きりにとらえられて、専門的な音楽家と

しての音楽に対する感覚や考え方といっ

しょになった時、最もよい答が出ると思

うのです。

コダーイシステムの場合には、今おっ

しゃったようなことを考えた上で教材の

検討、教材にみあった方法がなされてい

るのです。今、きくということをいわれ

ましたが、子どもにとって生理とか心理

とか年齢にみあったもので、ききやすい

ものは何かを音楽の中で考える。それを

おさえてもっと広い保育領域の中で結び

つけて考えていくという視点が大事だと

思うのです。現場で扱われている教材が

現代の子どもたちとびったりあっている

かを認識しなおす必要があります。

日本の場合、音楽教育は学校音楽から

始まっていて、それ以前の幼稚園とか保

育園とかの音楽教育はないのです。専門

的に考えた時、四〜六歳の年齢はとても

大切で後で手直しができないのです。で

すから幼児へのアプローチが、生活の中

で子どもが喜びながら音楽するというも

のと結びついてほしいわけですが、それから現場の先生方と子どもを観察しながら何かをみつけ出したいと願っているわけです。

**堀合**

生活の中で、というのはわれわれが音楽をどう入れていこうとするかの方法にすぎなくて、将来教育の場でつな

がって学習となつて発展していくようなもの、もともになるものを幼児期に入れていくことを一応努力しているようなつもりでいるのですが、先生が相当高度な能力を持っているとできないわけですが、特に生活の中に入れていこうとする場合、専門家ぐらゐの能力を持ち、はじめて生活の中に入れていく方法・正しい基礎が行なわれるのです。そこで私たちはいつも能力が足りないと思ひ悩むのです。

今までしていたことは、ちゃんとしたポイントをおさえないで、教材の羅列とかくり返しにすぎなかった場合もあると

思いませんが、今度は生活の中に入れてということですから、見た目はあまりに浮いたものがないと思ひますが、前より以上にポイントをつかんだ基礎を入れていかなくはないけないという点にむずかしさがあるような気がしています。

**関**

今年から、とりわけしていることをかえたわけではないのですが、そういう意識を強く感じているわけですが、例をうたにとるならば、その時間だけ、子どもと先生との間でうたうたいうのでなく、うたのふんい気とか感覚的につかむものと、生活の中で子どもが自発的な気持で吸収していつてくれたら身につくのではないかというようなことをねらいた

と思ひています。

**津守**

生活の中でといわれたのは本当にそうだと思うのですが、専門家と同じ能力がなくてというのは、他に絵でも

門家でなくてはならないことになるのですが、音楽については特にそうだとすることがいえるのですか。

**堀合**

音楽だけじゃなくてみな同じわけですね。

**加勢**

専門家というのを高くおっしゃっているわけで、総合点で本質をおさえていけば、技術的にそんなに高度でなくとも、心の音楽家であればいいというところがあるのではないのでしょうか。

幼稚園で音楽教育をしようとしても、保育の知識や経験がないとできないのです。長い保育経験をお持ちの方々と、い音楽教育をできる方がたくさんいると思うのです。しかし方法では違ひいることが多いのではないかと思ひます。

ピアノが弾けなければ幼稚園の先生でないというようなものがありました。そんなことよりも、子どもの目を見て静かな声で音程をはずさない程度にうたえる

能力があれば、音楽を教えることはでき

曲できる能力です。

のです。技術は教えられなくとも音楽する心を教えることができ、子どもはそれにより意欲がでてくるのです。だから、幼稚園や保育園の音楽教育の主要目的は子どもが音楽を好きになるということです、技術の鍛練とかは問題外だと思

うたよるより、子どもに合わせる方が落ちこぼれる子どもがへります。子どもにとって余裕があつて楽しめるので、結局は音楽が好きになるということです。世界的に子どものうたの伝承的なものは、子どもの生活の中から生まれたわらべうた

があつてそれにみあつた音楽があれば、両方きれいに入つてくると思うのです。その時音楽とお話を分けないでいっしょにやるのが一つの方法です。先生が子どもから即興的にひろう能力を前提として導入していくことができばよいと思

掘合 音楽の心を持つには、ある程度音楽を知り、専門的なことを知っていないといけないでしょうか。指導する者が心だけ持っていないでダメじゃないでしょうか。

で、だいたい二音構成です。日本の場合それが一音構成でもあるのです。平板的な音でリズムで変化が出てきます。日本のことばというのが特殊であつて日本の子どもの音楽教育という場合、私

でもなんであつてもどこか一部を、用意していた教材に入れることができれば理想的だと思うのです。先生の方はいろいろな教材を用意しておかなければいけないわけです。

加勢 ある程度の技術のレベルはあると思うのです。技術の種類が今まではピアノでしたが、どちらかというとたです。日常語で子どもがうまく使つたりあそんだりしていることをひろえる能力、旋律にうつつしかえたり、音域を子どもにあわせてかえてあげる、作詞作

たちが考えている教材が、はたして日本語で生活している子どもにあうかどうか考える必要があるのです。日本の音楽教育という洋楽です。わらべうたという言葉に密着した音楽教育がありますが、先がなくなつてしまふのです。現代っ子にアピールするようなお話

即興とかそういうものが、客観的に立派でなくてもいいと思うのです。二音とか三音とか、八小節とか四小節とか限定されたものを先生が知っていればよいのです。それを教えこむのではなく、それを発火点としてきちんとおさええた手持ちの教材を与える前提とするのです。

関 幼稚園の生活の方から考えます。子どもの年齢の小さいほどリズムが先行するような気がするのです。今おっしゃったように、うたを身体全体であらわし、そこに音楽的なものをつけていくということが比較的多いように思いますが、そこには音楽的なものをつけていくというものはあるからこそ、音を出しているものがある、きいてわかるというのではないかと思うのです。そうなるのと、音楽教育で一貫した教育ということ、音楽教育で一貫した教育という時、をいわれましたが、一貫したという時、どういう所で一貫したということか疑問を持つのですが。一貫した音楽教育なのか、一貫した生活、一貫した教育の中に音楽があるということなのかというところが問題になると思うのですがどうでしょうか。

加勢 一番効果的にとらえられるのがリズムだと思うのですが、身体的リズムとうたから出てくるリズムが別にあつていいと思うのです。コタローを例にとれば、そういうものを整理した時、手をたたくことと歩くことで全部が発揮できるといわれています。うたで結びつけようという姿勢がこちらにあつた場合、それが身体的なりズムと音楽を結びつける手だてになるというとはいえるわけです。

堀合 幼児期に基礎といいますが、どこを基礎というのか大きな問題でしょう。お互いに基礎といってもみんなが考えている基礎が違っていたらおかしいと思うのです。うたをうたったり、楽器を

したり、お遊戯をしたりするのを一応音楽の分野としていっていましたが、幼児期に何をやってたらいいかという大きな問題は創造性ということですね。それを音楽をかりて子どもの持っている創造性を養っていくということなのです。子どもの生活を生かすというところからいって、子どもが持っている創造性を養っていくということ、それは小さい個人にもあり、大きく考えれば組全体のリズム、生活のリズムとかいろいろなものですね。そういう中で創造性を養えば、身につけていくのではないかと考えています。

津守 広く考えると、音楽というのは子どもの生活の中にもともあるものだから、お互いに基礎といってもみんなが考えている基礎が違っていたらおかしいと思うのです。うたをうたったり、楽器を生かすというところからいって、子どもが持っている創造性を養っていくということ、それは小さい個人にもあり、大きく考えれば組全体のリズム、生活のリズムとかいろいろなものですね。そういう中で創造性を養えば、身につけていくのではないかと考えています。

もいわれています。たとえば絵の場合でも、先生には子どもみたいに立派な絵は決して描けないが、すばらしい絵を描かせることはできる。いろいろなことでそういうことができるでしょう。どんなにすばらしいことをいっても子どもにたっ

**関** 創造性だけでなく、精神的なものも技術的なものも最低のものは必ずもちあわせていたいです。

**津守** 何かいっしょうけんめいになっ

**加勢** おとなの場合、創造性の方は遅すぎます。技術は進みますが。  
**本田** おとなの創造性というのは学生さんのことではないかと思うのですが、十八とか十九歳になってしまった学生さ

ぶりした時間を与えてやらなかったり、思いきり動けるような場所を与えてやらなかったりしたら、いいものは出てきません。先生はじょうずでなくても、基礎

い人の方が年をとっている人よりも上の場合がたくさんあるわけです。しかし年をとっている人はそれだけいっしょうけんめいになってやって、若い人にはどう

**加勢** それはできますね。

**依田** 内容そのものを、知識をたくわ

ていれば、子どもの中から出てくるようなものを考えられるのではないですか。

**堀合** 私が高度といったのは、もちろん技術もですが、技術が高度というのはなくて、絵の場合ならば絵心とでもいうか絵に対する能力、理解力を先生が持っていることです。先生の創造性です。

がすべてにならないでもよいと思うのです。

創造性に入っていくような学び方をさせることを考えなければならぬと思います。音楽をとおしてこちらに学ぶ姿勢ができる人としてこちらに学ぶ姿勢が

うか絵に対する能力、理解力を先生が持っていることです。先生の創造性です。

ひきださせてもらう機会がなかったり、自分を出す機会がないことが、おとなの場合あるわけです。その時に音楽から創造性をひきだすことができるでしょうか

他の心もそこで生み出していけると思う

響はできないというような意味です。

造性をひきだすことができるでしょうか

し、絵画にむいている人は、それを吸収

しようとする心をおして音楽に対する

心が生まれてくるかもしれません。幼児に對してはそれでいいわけです。幼児には音楽の話をしても、もとは結局創造性を養うことが一番です。

自分で音楽が好きじゃなくても、それそれ好きなもので養っていけばいいと思います。

**加勢** 音楽というのは日常性だけでは出てこないものでしょう。むしろほうっておくと絵とかお話になり、先生がひき出さないと音楽はできません。

**堀合** うたはたしかにそうです。外国とちがいますね。

**加勢** 外国の場合、教会中心の風土があるため、音楽教育はいららないのです。だから音楽教育システムというのは後進

国にしかないのです。日本はそういう意味でハンガリーも後進国ですから、音楽の価値感を考え直さなければいけないと

思うのです。

今のところ小学生であろうと中学生、高校生であろうと、音楽の基礎がぬけているのです。基礎の評価ができるのはソルフエージの能力だといわれています。

一貫した音楽教育の柱はこれではかるとができます。基礎能力が端的にそこに出てくるわけです。音楽的文盲である

かないとかいう表現があるように、楽譜が正しくよめ、うたえるということ度感などが、幼児の段階でどこで布石

れるか具体的な要求があるわけです。基礎の布石ができれば幼児でも能率が上が

るといわれているわけです。だから専門家の立場からいえば、なんとかそこに布石をいれたと思うのです。

**津守** そこが今から研究の必要などころだと思うのです。音楽的文盲ということ

字を読めるようになる前に絵をみてわかるようになる

とか、耳からきく話しかお互いの接触でわかりあうとかがありま

す。音楽もきつとそういうものがあるのではないかと思うのです。だから音楽の楽譜がよめるという段階が、いくつもの

くつもあるだろうと思うし、そのへんのところ

がどうも音楽の問題になるとたいへんわかっていないことがたくさんある

みたいですね。**本田** たしかに今ある音楽の布石を、こっちから持ってきて子どもに与えるの

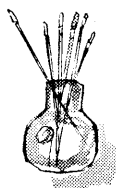
ではなく、音楽の最初の段階というものをもっと考えなければいけないのではないかと、本当に根から生えてくるもの



人

フランシス・G・ウィックス夫人

## 幼年期の内的世界 (三)



秋山達子

ウィックス夫人は情緒障害児の問題について、C・G・ユングの心理学を学びながら、彼女自身の臨床の経験をもとにして、多くのことを書き残していますが、その中でも子どもと想像上の友だちとの交友に關するものは、特に興味深く印象に残ります。これについてウィックス夫人は「幼年期の内的世界」の中で一章にまとめておられますので、その中から数例をとってここに紹介しようと思います。

誰でも多かれ少なかれ、子ども時代の思

い出の中に想像上の友だちを持った経験をお持ちのことと思いますが、ウィックス夫人はこれらの友だちが肯定的にも否定的にも、子どもの情緒面の発達に大きな影響を与えることを指摘しています。

子どもたちは幻想の中の自分やまた多様な人格の面を、人間にばかりでなくしばしば物にも投影しますが、例えば次の事例では、それらをいつも人形に投影して、いろいろな違った性格を持つ人形たちと一場の劇を演じていた少女の話です。

彼女は大柄で動作の鈍い無器用な子どもでしたが、体も感情も大きすぎて、統制がとれず、優雅に振る舞いたいと思ってても体がいうことをきかず、そのあげく激情のあまりに落着いて自分の気持を表現することもうまくできませんでした。それで他の子どもたちといっしょに遊ぶことも少なく、たくさんのお人形を相手にひとり遊びをしていましたが、その中でも特に二つの人形には特別の役割と性格を与えているようにしました。

一つは青い目で金髪の小さな人形で、いつも利口で輝かしく知的なことや社交的なことが得意のようでしたが、もう一つは布製のやぼったい人形で、のろまで愚かでいつもしかられる役割をしていました。学校

ごっこをするときも金髪の人形はよくできて、ほめられました。時には何か小さい失敗をして激しく打たれ、きびしくしつけられました。こんな時にはいつも布製の人形がやさしく抱きかかえられて、母親的な愛情を注がれました。この人形遊びの中の感情の激しい表現が、普段はおっとりとして静かな少女の行動とあまりにもかけ離れているように思われたので、母親が不思議に思つて相談に来られたのです。

そして次のことが明らかになりました。布製の人形は、人々が彼女をそのように考へ、また自分でもそう信じている現実の彼女自身であり、また金髪の人形はいつもそ

美しく可愛らしかったら当然彼女のものとなるはずの勝利感や喜びを味わうために、彼女はこの人形をとおしてつらい現実から逃避していたのです。

しかし現実の世界であまりに強くみじめさを感じるような時には、現実と幻想の違いを認めさせられて自分があわれになり、幻想の自分を打つて痛めつけ、軽蔑している自分の方に同情を寄せるのでした。こうして人形遊びの中に彼女は不満や激情のほけ口を見出していたのですが、これをつづけていると、二つの人格が完全に分裂して大きな問題となることもあるので、母親が人形遊びの異常な激しさに気がついたのは賢明なことであつたと思います。

このような事情がわかると、母親はいっしょに人形遊びに加わつて、布製の人形の日だたないけれどもやさしい性格や、よい点を指摘して現実の少女を励ました。また遊びを通じて子どもの気持をよく理解することに、今までよりもはるかに親密な関係を作りあげたことは、なにも

ましてその後の少女の成長に役立ったことと思ひます。

これに関連することで、ある若い女性が話してくれたことですが、彼女もやはり同年齢の子どもたちよりも大柄で、いつも深い青い目をした金髪の捲毛の少女の姿に憧れていました。そしてみにくい大きな自分はまだ殻なのであつて、その中にはこのよ

うな可愛い子どもが住んでいるものと想像し、いつか表面の殻が破れて、中から美しく優雅な王女さまがあらわれるかもしれないと期待していたのです。そして心の中に住むもう一人の自分はそのうちに勝手に成長して、もう一つの人格を作りあげました。彼女は長い少女時代に、両親やまわりの人々に心の中の美しいもう一人の自分を理解してもらいたかつたのですが、誰もわかってくれる人もないままに、彼女もまた本当の自分を受け入れることもできなくなつて、現実でおもしろくないことがあると、すぐ心の中に逃げ込んでしまふようになりま

彼女は大柄ではあっても実際にはなかなか魅力のある女性でしたが、他人とはよい関係を持つことができず、特に男性は決してこんな大きな女性を愛することはないだろうと信じこんでいました。彼女はまた食べるということは不思議なことだと考えて、きつとお腹の中にはもう一つの世界があつて、そこには外の世界のように街があつたり、人々が住んでいるのではないかと想像してみたり、また幸福な子どもたちが輪になって踊つたり歌つたりしているのかもしれないと考へて、食事の時にはいつも彼らにも食べさせているような気持になることもありました。

このように内の世界は外の世界とは別に發展し、父親が彼女をあまりかまひつけなかつたことなども影響して、最後にはあまりにもふくらんだ心の中の世界が彼女をおびやかすようになり、とうとう神経症を誘発してしまつたのです。

この話とは対照的に両親の愛に恵まれた健康な子どもたちもまた想像上の友だちを

持っています。ある少女は幼稚園に行かなかつたので、小さい時は現実に遊ぶ友だちをあまり持っていなかつたのですが、お庭にはいつもたくさんのおんなや小人の友だちがいました。毎朝起きるとすぐに窓を明けて彼らに挨拶をし、それからお庭に走り出して、彼らと話をしたり、遊びを發明したりしました。

冬にはよく家の中にも入つてくることがあつたので、彼らをよく見ることができないうおとなたちが踏んだり、上に腰かけたりしないように、よく気をつけていなければなりません。しかし少女が学校に行くようになると、これらの遊び友だちは次第に姿を消して、雨の日に彼女を訪れてくる程度になりましたが、現実の友だちがふえるにつれて、この連中の姿は全く見えなくなりました。

また別の少女は二人の想像上の友だちを持つていましたが、彼らはいつでも手をおせばとどくあたりにおいて、彼女はそれぞれに名前をつけて呼んだり、いっしょに踊

つたり走つたりして仲良く遊ぶのでした。このような例では想像上の友だちは肯定的な存在で、成長するにつれて姿を消すように思われますが、実際は思春期の幻想やおとなになつてからの夢の中にも繰返しあらわれて、想像力となつて残り、彼女たちの生涯を豊かにします。

さて、ここにユングも自著に引用している大変興味深い事例があります。それは小さい時の手術の結果、いくらかの肉體上の欠陥と精神上の不安定さを残している七歳になるマーガレットという少女の話です。

彼女は愛情深い両親の下で、ベットや年下の友だちやその他、他の人たちには見えない多くの想像上の友だちにかこまれて、毎日を気楽に暮らしていたのですが、学校に行くようになった時に、今まで現実とは関係がなく、まったく彼女一人のものであつた自由な時間の大部分を奪われてしまふことになりました。彼女は肉體的には不利な条件を背負っていましたが、豊かな想像力を持つ少女で、このような少女を保護する

ためには強い愛情しかないと思われたのですが、彼女はこの愛情による保護もよく承知していました。それに甘えてかえって両親をいつまでも支配するために、肉体的に不利な状態を保とうとするようなところもありました。

それらは両親の愛や注意を自分に集めるのに都合がよかったのです。そしてはじめに他の子どもたちと出会うようになって、それらが現実では劣等なこととして軽蔑されるのがわかったのです。そこで彼女は意識の上では他の子どもたちと同様になんでもできるようになりたいと思つたのですが、また一方無意識の中では、支配力を与える道具として、自分の不利な条件にしがみついていたのです。

そして新しい世界に慣れようといくらも努力はしてみましたが、すぐに昔のたよりなきと幻想の中に退いて、左利きの手の無器用さや軽い歩行困難などの肉体的な問題がかえって誇張されるようになり、見せかけの甘えた生活に戻ってしまいました。

ある日家で先生と勉強していた時に、彼女は突然「私には双子のアンナという姉妹があつて、私によく似ているけれどもいつもきれいな服を着て眼鏡もかけていないのよ。(彼女は視力が弱いために勉強の時には眼鏡をかけましたが、それを嫌っていました)もしアンナがいつしよなら、もっとよく勉強できるのに」と言いました。

そして先生の許可を得ると部屋の外に出て早速アンナを連れてきましたが、それから後はいつもアンナが傍にいて、彼女が書きとりをすると、アンナが書くといった具合に勉強が進められました。ある日すべてがうまくいかなくて、マーガレットは癪癪しかたを起こして、皆母親が悪いのだといつて泣き出しましたが、アンナに聞いてみたらと言われると、しばらく部屋の外に出ていましたが、やがて戻ってきて、「アンナは私の方が悪いと言うのよ、だから勉強を続けるわ」と再び静かに机に向かいました。時には気持が混乱してアンナも故意に忘れられることもありましたが、しばらくす

ると「きつとアンナは淋しがっているわ、もう戻って来る頃じゃないかしら」という声とともに、アンナは再びあられるのでした。

またもう一人の想像上の友だちがいまして、彼女はめくらなので、いろいろと助けてやらなければなりません。彼女はめくらならばいやなことは何もしなくてもよいから幸福なのだと説明しましたが、めくらの子どもの作つた労作を見せられると不利な条件の下でも甘えてはいけないのだということがわかったのか、大変感心したようで、それからこのめくらの少女はあまりあられなくなりました。

そしてしばらくたってから、また母親に対して怒りを爆発させたことがありました。アンナに聞いてごらんという忠告を聞いてしばらく考えていましたが、やがて「アンナに聞かなくなつたって、そのくらいは私にもわかるわ、本当は私が悪いのよ」と言つてすぐにおとなしく机に向かいました。この頃にはアンナは彼女の分身の投影

であることがわかりかけたようですが、もちろんこのような心理の成長の過程は簡単ではなく、三步進んでは二歩戻るといいうに進行と退行を繰り返しながら発展していったのです。

このような子どもを幻想の世界から切り離そうとすることは大きな誤りです。それは現実逃避に使われぬ限り、未知の国の富と資源のあらわれであって、子どもの成長には何より大事なものです。彼女はこうして外の世界でも内の世界でも徐々に成長していきましたが、ある日は学校から飛んで帰ると椅子によじのぼって二時間もじっと一人で考えごとをした後で、いかにも満足そうに椅子から降りると、今度は元気に外の世界や現実のお友だちの中に遊びに出ていくようになりました。

このように、なんとかしてアンナに投影された分身を自分の中に受け入れようと努力をしていた頃、ダフィという一人の少女があらわれました。ダフィはおとなにもならず、よい子でもなくて、アンナが無

意識の明るい面を代表していると、ダフィは暗く退行的な面をあらわしているように思えました。勉強をしている時や学校ではダフィはあまりあらわれないようでしたが、うちであまやかされてのんびりしている時には、靴の紐も結べず、洋服も一人で着られない赤ちゃんで怒りっぽいダフィが時々傍にいます。しかしマーガレットが成長するにつれてダフィのわがままは彼女の目にあまるようになり、しばしばキキ・ハウスと彼女が名づけた近所の古い空家の中に閉じこめられてしまうようになりまし。

アンナはその後もしばらく彼女のよい友だちとして傍に残っていました。やがてマーガレットが一人でなんでもできるようになり一般のクラスに入って他の子どもたちといっしょに遊べるようになると、「いつか近いうちに、私は双子の姉妹を押しつぶして殺してしまうわよ」という言葉とともに次第に姿を消してしまいました。

マーガレットのように、幼児期の病氣や

その他の理由で不利な条件のもとに育つ子どもたちには、普通の子どもたちよりも深い愛情と厚い保護が必要なのは当然です。しかしこれはどうしても過保護になりがちであって、むしろかしい現実からますます逃避する場所を与えることになってしまいます。このような時にどこで保護を打ち切るかということはむずかしい問題ですが、より深い愛情の下に育つ子どもは愛情薄く育つ子どもよりも、よい立場にあることは確かです。ただどちらの場合にも普通の生活や社会の責任に適応するためにはむずかしい時期を通らなければなりません。

マーガレットは自分をとりまく安全で保護された世界から、初めて彼女一人が愛情の対象というわけではない冷たい外の世界に出た時には、驚いて自分一人で支配してられる幼児的な世界に戻ろうとしました。が、心の奥深くでは、進もうとする彼女と退こうとする彼女が争うことになりました。

外界では彼女は幼児的な自分と組んで行動したが、もう一人の自分はアンナという

姿に投影されて、二つに分かれた彼女自身が現実に対決することになったのです。

ここでこの二人が永久に別の道を進むことになるか、または一つの人格の中に統合されるか、というところに問題があります。前者の場合は退行的な半身はいつまでも子どもっぽい行動を続け、一方進行的な半身は幻想の世界から出ることはできません。そして後者の場合は投影された幻想の半身は再び個人の中に受け入れられて、一つの人格の中に統合されるのです。

マーガレットははじめこそあまりにきびしい現実面に直面して幼児的な世界に退行しかけましたが、しかしそれはよくないことだということは知っていました。そしてアンナがあらわれて、ただ他人から押しつけられただけでは恐らく認めることができなかつたであろう真実を受け入れることができ、ついにはアンナと同様になんでもよく聞きわけられるようになり、アンナは不必要となつて、最後には殺されて死ぬことになりました。しかし前にも書きましたよう

に、アンナの死と共に幻想的な世界が全面的になくなるわけではありません。この世界こそ生きている創造力の源泉であり、人間の成長過程で、古くなった象徴を除いて常に新しい状態に即した象徴を生み出していく力となるものなのです。

幻想の世界はいつも遊び友だちとして対象化されるとは限りませんが、ただ友だちとして人格化された場合は、内的世界を知るためのよい端緒となります。

子どもの気質によつて、この人格化はいろいろな姿をとりますが、例えばある少女は支配的な母親の役割が好きで、多勢の想像上の子どもたちを抱えて世話をするのが好きでしたし、またある少女はとても気がやさしくて、彼女の友だちは皆双子でした。そして家族の誰かが旅行したりする時にはいつでもそのうちの一人を借してあげようと考えていました。ある少年は暖房用のラジエーターの後に住んでいる「三人の王様」を友だちに持っていて、彼らはラジエーターの栓を開けばいつでも飛びだして

くるのでした。彼らは神秘的な力を持っていて、この臆病な少年が恐ろしい気分を襲われる時には心の中でそつとラジエーターの栓をひねるのでしたが、そうすると自分の中に神秘的な力が溢れ出て、恐ろしい気持も消えました。

家庭的に淋しい子どもたちもよく想像上の友だちを持つものですが、ある父親を無くした貧しい子どもは、いろいろなものを買ってくれる想像上の父親を持っていましたし、また両親が仕事で忙しい家庭の子どもは、その子にだけしか存在のわからない「本当の」姉妹を持っていました。このように情緒的に障害のある子どもたちばかりでなく、多くの健康な子どもたちもまた想像上の友だちを持っているのです。個人の主体性と人格の確立は長い苦しい過程を必要とするもので、多くのおとなたちもそれを達成しているとは言えません。まして子どもたちはまだ将来の可能性の中に住んでいるのであり、多様な状況に出会って多様な面を發展させ、その中から価値のあるも

のを残して、価値のないものや害になるものを除きながら一つの人格を作りあげていくのですが、これらの過程では、想像上の友だちが多くの役割を果たします。

健康な子どもたちは幻想の中に英雄や王女の姿を描き、それらはお伽話のように自然に受け入れられ、楽しまれて、成長を助ける役目を果たした後に忘れられていきます。しかしまたそれらが、現実の逃避や責任逃れのために使われる時はジキル博士とハイド氏のような二重人格を作りあげることもなります。

そして最後に、子どもの魂は輝かしい暗黒と霊性の神秘的な世界に住んでいます、意識化に向かって不断の努力を続ける自我の出現に伴って、この霊的な世界からも友だちが訪れることがあります。この心の深奥から来る友だちは、知的に理解されるというよりも、むしろ未知の、そして不可知の世界に住む魂そのものの象徴として体験されるという方が、適当でしょう。

「僕には友だちがあつて、彼はキラキラ

星のように小さくて、まっくら闇のように大きい」この友だちがいつどこからあらわれたものかはわからないが、少年がこう言った時には彼は既にその子どもの心の中に存在していたのでした。静かな暗黙の了解のうちにこの友だちはあらわれたが、私はここにただ、それが子どもの自我と魂との対話の形をとつてあらわれたことを知る特権を持ったこととしかできません。

「キラキラ星は星よりも小さいけれども、それは本当の星なんだよ、そして花火のようにはきらめくけれども、いつまでもきらめきつづけるんだ」「そしてまっくら闇は昼でもやってくることがある。そんな時には僕はキラキラ星のことを考えようと努力するんだ。星がまっくら闇のまん中できらめきだすのを見ると、僕はやらなければならぬことはなんでもやりとげられるように思うんだ。そしてまっくら闇もまた僕の友だちなんだと思うんだよ」

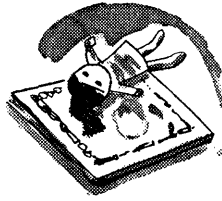
このまっくら闇こそ、意識の明るい光を覆い隠して人を無力感に誘う無意識の流れ

であり、未知の世界の恐れと悪と無知の中に秘めた暗い影なのです。しかしこのまっくら闇もまた友であり、いつか祝福を授かる時までは対決を続けなければならない天使なのです。そしてこの中にキラキラ星を見いだそうとする努力こそ、この体験を得るために絶対必要な条件であり、その光は限りなく永遠に消えることもない。それは無数の蓮の花にかこまれて静かにすわられて、瞑想の中から光を放つ仏様の御姿であり、子どもの心の中に浮かび上がった生命の根元である真実の自己の幻想です。

それから四十年たち、今では一人前の男性に成長したその時の子どもの魂の中で、キラキラ星とまっくら闇は限りない統合に向かつて変容の力を働かせています。

このようにフランシス・ウィックス夫人は想像上の友だちという一章を結んでいます。ウィックス夫人については、まだおしらせしたいこともいろいろありますが、あまり長くなりますので、この辺で一応筆をおくことにしたいと思います。

# ユートピア



鈴木直美

「つめたいね、せんせい」「ふゆっこぴゅんがどこかに隠れてるかもしれないよ」「ヨーシ、ぼくがやっつけてやる」数人の男の子たちがそういって寒さの中を元気に走っているような初冬の日。

「きょうは水曜日(お弁当なしの日)だしお天気もはつきりしないし、お部屋の中で思いきり遊べばいいわ」と、そのみを目標としてスタートを切った。もうすっかり幼稚園にも慣れ、それぞれがとても楽し

い毎日をすごしているな、と感じられる三歳児のクラスである。

そして同じく入園してやっと八ヶ月の新米先生の私もよけいな緊張もだいぶとれてきて、子どもたちと走ったりころがったりして遊び楽しく毎日を過ごしているが、同時にそろそろ二期も終わり一年のまとめの時期にはいりかけて、いったい私に何ができたろうかと不安を感じたり、反省させられたり、あせりのようなものを感じたりしているこの頃でもある。

特に、毎日をたたく遊び満足した顔で帰れることを目標にすごしている、形になって残るもの、が少なく、音楽リズムの領域ではこの程度のことを、絵画製作では……などと書いてある本を読んだりする

と、ピアノをひくと大声でどなってみたり、スキップなんてぞつたいしたいとがんばったり、お絵かき帳などほとんど白紙ばかりだったたり、セロテープなんかお誕生会のかご作り(毎月一回これだけはかなり義務的な活動)以外使ってるの見たことなかったり……そんな子どもたちを見て、これは保育者がいたらないからではないか

と非常に心配になったりもする。

そんなある日(つまり、はじめにかいたお天気のきえない水曜日)いつものようにおもちゃの散乱するお部屋で、それぞれがそろそろ遊びに定着しはじめた頃突然、「先生、レコードかけて、おおかみの」と女の子がやってきた。「三びきのこぶた」の絵本を見ていて思いついたらしい。音楽劇のレコードが何枚かあるうち、だいぶ前にかで「赤ずきんちゃん」をかけたことがあり、その時はわずか二、三人が聞いただけだったが、それを覚えていたらしい。ところが「三びきのこぶたが」みあたらず、彼女の了承をえて「狼と七ひきの子やぎ」をかけた。

その音を聞きつけて数人が集まった。

「えーと、音楽劇……劇遊び……リズム……」と、音楽劇……劇遊び……リズム……もなくとまどいがちの先生にはおかまいなく、みんな目を輝かせて聞いている。「しかたない、なるようになる」と常にいきあたりばったりがお得意の(これは自慢にはならないだろうが)私はレコードの進み方



にあわせてお話をいれていった。

一回終わるともう一回……そのうち狼のところに簡単な動作っぽいものをいれてあげると、子どもたちもう子やぎになりきったようにキヤーキヤー騒いで逃げたりしている。だんだんに他の遊びの子どもたちもはいつてきて、ほとんど全員が集まってきた。おかあさんやぎになる子、狼になる子、一番小さい食べられないやぎになる子、そんな役割はわからないけどただ楽しそうに皆と動いている子、台本(?)以外だけどウルトラセブンになって狼をやっつける子まで出てきて、何回も、何回もついでにお帰りまでくりかえしくりかえし楽しんでた。

狼に食べられるところ、狼のおなかをはきみて切るところが最高に楽しいらしく、そのうちレコードなんて無視気味。終わってからは「あれえ、レコードまだなってる」と叫ぶ子がいたり、ちゃんと曲のつてスキップしたりしていると思うと、全然おかまいなしだったり、狼志願者が多くて二、三人子分をひきつれて狼がきたり、もういえてもいいのではないかしらと思っ

てもまだ話を聞いたことのない子どもの口

から「ごめんさい」(狼が最後にみんなにあやまるころ)が聞こえたり、はじめのうちは狼が来るとほんとに泣き出した女の子がちゃんとおかあさん役ではおかあさんっぽくなったり……ともかく皆非常に楽しく、よくも飽きないと感じるほど何回も、「上演」された。いつもこういう新しいことにガンとしてはいらずにいる男の子までが最後の頃には参加し、おかたづけの時に「つまんないな、お弁当ないと遊べないよ」とブツブツ言っていた。

こんな一日が終わって前述の不安が少し軽くなった。三歳の音楽劇ってこれでいいんだな、「ちゃんと」することよりも楽しかったこと、それがこれから役割をとることにも、リズムにあうことにも、いろいろなことへの第一歩としてのすばらしい芽になるのではないかと子どもたちにはつきり教えてもらったような気がする。あそこで私が変に音楽リズムとか「言語」「社会」とかを気にしたら、そしておとなの好みでまとめたりしようとしたらあんなに長続きしなかったと思う。

よく考えてみたら、みんなで歌う時に大声をだす子はいつかお庭で自動車の歌をいっしょに歌ったりし、皆の中ではスキップしない子だってお手洗いから帰ってくる時スキップで帰ってきたし、お絵かき帳が白紙でも黒板に大きな絵をかいていたり、普段何も作らない子がふっと「ギャングのピストル」を作ったりしたし……自然な生活の中でいろいろなことを身につけていく子どもたちをみて「子どもの本当の自由」のむずかしさを感じる。

特に三歳児なんか、先生が「カリキュラム」や「教育課程」で頭の中をいっぱいさせているより、自分と同じように怪獣になつて走ったりころがったりしてくる方がずっといいのではないかと思う。子どもが本当の姿にふれて、その上で未来を見つめて「今、この子に何が必要か」を適切に考えてあげられる先生になりたい。日々の計画や準備に怠慢で不勉強な私の「逃げ道」のような気もしないでもないが、「この話をしてあげよう」と思っていたってその日は違うお話の方がその日の子どもたちには似あう時だってあるのだから。

# 幼稚園のある一日



九 月

内 田 和 子

## 一、はじめに

長かった夏休みも終わり、日焼けした元気な顔が、幼稚園いっぱいにあふれている。

一段と成長したこの幼児たちも、一学期間、はじめて幼稚園生活を体験したわけである。幼児自身にとっては、はじめての集団生活ということの中で、楽しい中にも自分を押えてみることを勉強したわけである。幼児には疲れがみえてきていたが、夏休みによって、もう一度家庭的なふんい気を十分味わうことができ、そこで家庭でできない経験をしたことであろう。

海へ山へいなかへ町へと家族とともにした経験は、幼児にとつて、大きな心の糧たすけとなったであろうと、私の胸の中は、期待でふくらみはじめた。同時に、集団からとりのこされる幼児がないように、友だちを十分認める中で、自分を生かしていく幼児になってほしいと思う。そのために、私自身、ひとりひとりの幼児をよく見つめ、集団の中で満足して交友関係がすすめられるよう、教師と幼児の人間関係を基本にしながら、幼児対幼児の関係を大切にしていきたいと思う。

しかし、実際には、幼児たちは、友だちに会えるのがうれしく

て、ただなんとなくはしゃいでいる者、なつかしそうに友だちと話をしている者、教師の手をとりながら話を聞かせてくれる者、など、さまざまで、入園当初の状態にもどった幼児たちもいる。

そこで、一日も早く生活リズムを整えてあげ、ひとりひとりの幼児に満足を与えながら接する中で、それらの幼児が、うまく集団に適應していくことができるようにしなければならぬと思いい、九月の幼児の姿をつぎのように考えてみた。

◎ 生活環境を整え、集団の中で安定した気持で行動できるようにする。

◎ すすんで物事にあたる態度をつける。

◎ あそびの中で、ルールのあるあそびをださせるようにしむけ、共同の仕事やあそびができるようにする。

つきに、具体的に、ある一日について述べてみたいと思う。なお、私のクラスは、一年保育五歳児三十五名である。

## 二、実践例

(1) 月日 九月一六日(水)

(2) 前日の活動

① 幼稚園ごっこ

K子を中心にして、はじめ四名で「おうちごっこ」をしていたが、M子の発案で「幼稚園ごっこ」に移行し、教師も仲間入りしたため人数も増し、幼稚園とうちのグループに分かれてあそぶ。

② レールセット

机・椅子・積木・円筒の補助材料を利用して、六名のグループでハイウェイを作り、立体交差してあそぶ。

③ リレーごっこ

二組に分かれ、円筒三個ずつ一列に並べ、それをとびこし、椅子をまわって、次の者に交代する。

(3) 本日の指導のねらい

・ きっかけをみつめて、友だちとあそぶ。

・ グループの活動の中で、ひとりひとりの幼児の発言を大切に育ててやる。

(4) 実践

長い休みも終わり、幼稚園生活を待ちのぞんでいた幼児と、集団に対して引っ込み思案になった幼児が見られる。その幼児たちを迎えて、教師自身、一学期における先入感にとらわれず、すなおな気持で幼児の登園を待つ。どの幼児も安定感をもって自分の生活にとりくめるよう、ひとりひとりの幼児のもっている要求に直接ふれ、判断してやらねばならない。そのために、「幼児の心

と教師の心のふれあい」を大切にし、それをおして、幼児と幼児の心のふれあい」にのばしてやりたいと思う。

## 八・一五

・「先生、おはよう」と元氣者のT男ら三名が保育室にとびこんでくる。「おはよう」と教師があいさつを交わしているうちに、おたより帳を教師に手渡し、急いでなわとびのところへ走って行く。そして、なわ電車を作り、「発車、オーライ」と廊下へ走り出して行く。T男らのたのしいようすを眺めながら、きょうも元氣よく活動できるだろうと安心する。

・K子が登園してくる。K子もあいさつをすませると、「先生、きのうのつづきをするわね」といって、きのう残しておいた幼稚園ごっここの場所へいき、おもちゃを整理しながら友だちを待っているようである。一学期は、自分の意志をとおそうとして、よくけんかをしたり、告げ口をしてきたK子が、この夏休みの間に大きく成長したとうれしくなる。T男やK子のようにのびのびと自分の考えで行動できる幼児に対しては、教師としても同じような気持で幼児に接することができるので心から楽しくなる。

・つづいてW男が入ってくる。W男は、いつものように周囲をきょろきょろと見たしている。そして、上窓のところにトンボ

を見つけた。「先生、トンボがおるわ」と指さす。教師も見ると、大きなトンボが窓枠にとまっている。

そばにいた四、五名の幼児も気がつき騒ぎだす。そして、窓のところにかけより、とびあがってトンボを取ろうとする。このさわぎにトンボの方もびっくりして、飛びたつたので、幼児たちは、キャッキョッキョといって部屋の中を走りまわって、トンボを追いかける。トンボもしばらく逃げまわっていたが、やっと窓の外へ逃げていった。

幼児たちは、がっかりして「とんでいったなあ」と、顔を見合わせている。そこで教師は、「残念だったわね。でも、トンボは広い空の方がずっと楽しくあそべるのよ。そして、トンボはトンボの仲間とあそぶのが一番いいのよ。みんなだってお友だちがいるから楽しくあそべるのでしょう」と話をしてあげると、「うん」といって、運動場へあそびに行く者、また友だちのあそびを見に行く者と分かれていく。

この幼児らは、トンボという突発事件で、調子を狂わしたようであるが、きょうは、時間的に短く（五分ぐらい）早く本来の幼稚園の生活リズムへ切りかえられたので、教師としては、やれやれと安心した。

このような場面は、ときどきあり、トンボに限らず犬などが入

つてくると幼稚園じゅう大騒ぎになることが多くある。

・ T子がだまって部屋に入ってくる。この幼児は、五月に転園してきて、集団生活に慣れにくく、やっと友だちができたと思ったら夏休みに入ったので、二学期がはじまって、また、入園当初の不安定な状態にもどってしまったようである。

だまって教師のところにおたより帳をおきにくる。「Tちゃんおはよう」と声をかけたが、だまって本立てのところへ行行ってしまふ。そして、ひとりて本を見はじめ。バラバラとめくっては、次の本とかえにくるので、きのうみんなに読んであげた『黒うさぎと白うさぎ』の本を手渡してあげると、うれしそうに受取ったが、やはり、バラバラとめくって見ているだけである。

やがて、T子は、本をしまいK子たちの幼稚園ごっこのところへ行きだまって眺めている。

教師が直接ことばをかけたり、手をとって指導すると自分の内にとじこもってしまうタイプなので、しばらくT子のようすを見守ることにした。

今度は、テラスにでて、外であそんでいる友だちを見つめている。やがて、また、幼稚園ごっこのところにもどってきて、友だちのようすを見ている。ここであそびたいのだなど教師は判断して、リーダー格のK子に「Tちゃんも入れてあげて」とたのむ

と、K子は、気持よく受入れてくれて、「Tちゃん早くここにすわりな」と椅子を指さす。T子は、だまってすわる。もう少しようすを見るため少し離れて観察することにした。

T子のように自分の要求をうまく表わせない幼児に対しては、直接教師自身がかたばや動作で指導できにくいので、教師自身が早く幼児の心をつかみたいという気持をおさえて、暖かく見守らねばならない。非常に、根気と愛情が必要なため、教師自身が試験の場に立たされているようで、何もできない自分にもどかしきを感じる。

・ F男とK男は、何か落着かずそわそわとしている。だれかを待つているようである。N男が登園してくる。二名は、急いでN男のところへ走って行って「Nちゃん、いいことがあるので早くおいで」と急いで廊下へ連れていく。「なにや」とN男は、ここにこついでいく。(N男は、だれからもすかれ、創造力が強く、運動能力もある、男らしいリーダー格の幼児である)

二名は、N男に何かこそそこそとカバンの中からとりだし手渡している。F男とK男は、教師に気づき「おい、かくせ」と手でおってしまふ。「あら、先生にも見せてよ、だめなの」と、いうと、F男は、「うん、いいけどさな、Kちゃん」といって、手の下からグニコのおまけのトランジスタラジオと自動車を見せて

くれる。N男は、「これ、ぼくにくれたの」と返事をする。

「そう、よかったわね」と、教師はF男とK男がN男と友だちになりたいため、このようなことをしたいのだなという気持をすなおに受け入れてあげ、この小さなおもちゃが、幼稚園のあそびに影響することもないので、きょうは、家庭のおもちゃをもってきてはいけない約束も例外として認めることにした。

N男は「ありがたい、ぼくも集めているで、あした三つもってきてやるわ」と教師の顔を見ながらF男らにいつている。そして、カバンにしまいながら「Fちゃんは何がほしいのや、人形か」と聞いている。F男は「人形はいや、何でもいいわ」と答えている。そして、「Nちゃん、はようぼくとウルトラマンごっこしてあそぼう」といっしょうけんめいに誘いかけている。N男は、「うん」といって、F男らの机のところへ行き、粘土であそびだす。F男は「Nちゃんはじょうずやでウルトラマン作ってな。ぼくは、怪物作るでな。Kちゃんは、わくを作んな」といって、楽しそうに話しながらあそんでいる。そして、三名合作でウルトラマンが怪物をやっつけている模型を作りだす。

あこがれのN男とやっとなあそべたF男とK男のうれしそうな顔を見て、教師まで心暖まる気持になった。このように、いっしょうけんめい友だちを作ろうとしている幼児をみると、い

じらしくなり、何とか力をかしてやりたくなり、早まる気持をしずめるのに、自分自身とたかかねばならない。

また、一方では、まだまだ教師との一対一の接触をのぞんでいる幼児もいるわけで、その幼児には、十分その要求を満たしてあげねばならない。

以上のようにいろいろの状態の幼児がいるが、二学期が始まって二週間では、これ以上のぞむことはむずかしい。今後は、ひとりひとりの幼児の要求を見つけてあげ、いっしょにあそぶことにより、満足感を味わわせ、幼児がのびのびと豊かな経験ができるよう、また、交友関係が深められるように心がけていくことが大切だと思った。

## 九・〇〇

全員が登園をすませ、ごたごたした幼稚園の生活リズムにおけるウォーミングアップのような時を経て、落着いてあそびだしたようである。

### 幼稚園(ごっこ)

友だち待ちをしていたK子は、きのうのメンバーが六名そろい、相談をはじめた。K子「きょうもわたし先生にさせてな」

M子「わたしは、おかあさん」とみんなの同意を求める。それからM子を除いたみんなで、積木を利用して、机と椅子を作り、絵本を全部本立てよりもつてきて、一カ所に積んでおく。K子は、オルガンを作り、絵本を楽譜にみたててひきだす。他の四名もダイヤブロックのかがを持ちこみあそびはじめた。M子は、ひとりでママゴトコーナーでごちそうを作りはじめる。Y子とA子が「入れて」といって仲間入りをする。K子が「みなさん片づけましょう」と、声をかける。みんなは「はい」と返事をして、ブロックなどを片づける。

K子「きょうは、先生といっしょに運動会の練習をしましょう」といって、K子を先頭に一列になって行進をはじめた。そろそろみんなはついて歩く。そこでK子に「Kちゃん、この鈴ふって歩いてごらんさい。みんなじょうずに歩けるわよ」と教師がリングベルを渡すと、K子は、「キラキラ星」を口ずさみながら鈴をふって歩く。さつきよりじょうずに行進ができていようである。K子「きょうは、これで幼稚園おしまいです。ごあいさつしましょう」というと、他の幼児は「先生、さようなら」といって、M子のいるおうちへ帰って行く。K子のさつきの動作を見て、ことばつきといい私のとあまりにも似ているので苦笑する。とともに、自分の平常の幼児の接し方について反省させられた。

一方、M子はみんなが帰ってきて大張切りで、今まで作っていたごちそうを机の上にならべ子どもたちにたべさせている。M子「幼稚園で何してきたの。ごはんをたべたら勉強して寝なさい」と子どもたちにいい聞かせている。M子の母親の顔が私の目の前に浮かび、M子に同情してしまう。私自身が親に対して、子どもとはどういうものか、また、どのように発達していくのか、親といっしょに考えていく機会の少なかったことを反省する。

一方、K子は、幼稚園ごっここの道具をひとりで整理している。それをじっと見つめているT子を見て、いっしょにあそびたいのだなど判断して、「Tちゃん、先生といっしょに幼稚園ごっこに入れてもらわない」といってT子の手をつなぎ、教師もK子の仲間入りをする。

しばらくすると、母親役のM子に見送られ四名が「先生、おはよう」といって、幼稚園へくる。先生役のK子は張切って「きょうは絵かきしましょう」といって、みんなに絵本を配る。B子「絵本より本当の自由画帳をもってこよう」と発案し、みんな自分のたちの自由画帳とパスを持ってきた。

教師もいっしょになって活動していると、K子「先生おると恥ずかしいわ、あっちへ行つて」という。「えやないの、いっしょにしよう」とS子はいう。考えてみれば、先生役のK子は、本物

の教師がそばにいては、やりにくいにちがいない。

そこで、このグループは、教師がいなくても十分活動ができる  
と考え、一方では、教師といっしょにあそびたいというS子の気  
持も受容しながら「そしたら、もう少したったら、また、幼稚園  
の子どもにしてね。先生Cちゃんのところへちよっといってくる  
わ」というと、S子も「うん」といつてくれたのでこのグルー  
プから離れる。

一学期期だったら教師がいると喜んであそんだK子だったのに、  
自分たちだけでもあそべるように、また、はっきりと自分の思っ  
ていることをいえるように成長したことをうれしく思った。

#### レールセット

レールセットは、ひとりでもあそべるし、友だちとすれば、な  
お楽しいという構成遊具なので、入園当初から人気のある遊具の  
一つである。

二学期に入っても四、五名の幼児が興味を示している。しか  
し、一学期のように長くのぼすことにより満足するというのでは  
なく、場面をせばめ、いかに複雑な立体交差をするかということ  
に関心を集めている。

K男・S男・F男・O男の四名も登園すると、すぐレールセッ

トのところいき活動をはじめ。

K男「きょうは、四重列車にしよう」とひとり決め、レール  
を四本横にならべて、出発点を決める。他の幼児もそれぞれ勝手  
にレールを作っても満足するものがないことを今までの経験  
で十分知っているのので、だまってK男に協力している。S男「K  
ちゃん積木でトンネルしてもいい」と聞くと、K男「うん」と返  
事をし、同形のレールを四個ずつ揃えている。O男は、椅子と積  
木の板をもってきて、椅子に斜めに板をおき、大きな坂を作り、  
そこへレールをひいている。「おい、これも使おうに」とF男が  
円筒の小さいのを二個もってくる。O男「それは、山の中をお  
るトンネルにしな」F男「この椅子の中をおすのやろう」O男  
「そうさ、手伝ってやろうか」といつて、F男とO男は、大きな  
山の中へトンネルをおした。

四個ずつレールを分け終わったK男は、出発点のレールへそれ  
ぞれをつないでいる。直線で少しつなぎ、カーブでふたてに分か  
れ、それぞれすんでいく。S男は「Kちゃん、こっちの線ぼく  
のとつなげて」とたのむ。K男「よし、ぼくのおわりとつなげ  
るようにしてな」という。S男は、うれしそうにききにつなぎだ  
す。このすばらしい構成力を見て、教師自身この幼児たちに、活  
動をにぶらせるような助言を与えてはと思ひ、遠くからようすを



見ることにする。

リレーあそび

テラスでは、E子ら六名が円筒をもちだし二組に分かれて、リレーをやっている。どのようにしてあそんでいるのかと思い、教師も仲間に入れてもらう。三名ずつ分かれ、それぞれ円筒を三個ずつ一メートルぐらいの間隔をあけてたてに並べ、一個ずつとびこし、その先にある椅子をまわってもどってくる。そして、次の走者へタッチしていく約束らしい。

E子「あんたたちこの線にならびな」といって、チョークで線をひく。T子「一列にならぶの。Hちゃん横へではいかんの、ちゃんとならびな。わからんやないの」という。H子もいわれたとおりにおしている。「用意 ドン」とT子の合図で、両組一斉にスタートする。全員とびあがって応援している。T子も走る仲間に入り、いっしょうけんめい走っている。

勝負にこだわらずに何回でも走っている。このあそびに気づいた幼児が集まってきて見ている。M男「何やどっちが勝ったかわからんわ。先生どっちが勝つとるの」と聞く。教師も、M男がいどころに気づいてくれたと思ひながら、「先生もわからないのよ」と返事をする。

幼児たちの勝負についての興味は、はじめは勝負にこだわらず、自分が力いっぱい行動することに満足覚え、つづいて、一対一で競争して勝つことに、それからグループで競争して勝つことに興味をもっていくようである。

すばやくT子が前にでて「だれから走ったの、手あげな」という。N子とA子が手をあげる。N子は先頭に立ち、A子は、前から二番目にいる。「Nちゃんの組が勝ったんやないの」という。そばにいた者も何もいわず「早ようつづけてしよう」という。

そこで教師は、リレーについて正しいあそび方も理解してほしいし、勝負についても共通の理解をもってほしいと思い、「そうね、では、よく判るように、今度は先生が見てあげるから、もっと広い場所でしましょう」と誘いかけると、「わあい」とみんなは喜んで「どこでするの」とたずねてくる。「そうね、運動場のまん中がいいわね」というと、T子「でも先生、筒はいいけど椅子はもっていけないでしょう。まわるのに困るわ」という。

「そうね、じゃあ、もっといいものをもつてあげるわ」といい、フラフープと円筒をもって外へでた。

何をするのだろうとおおぜいの幼児が集まってきたので「それでは、もっとおもしろいやり方で、みんなとあそびましょう」と教師がいうと、幼児たちは、とても強い興味を示してきた。そこ

で、教師が中心になり、二組に数をきちんとわけ、フラフープをくぐりぬけて、円筒をまわってもどってくる。そして、次の者にタッチして交代することを説明し、一回だけ走る約束をして、はじめ。

A組は、ひとまわりするとちゃんと待っていたが、B組の方は、もう一度走ろうとするので、みんなに注意されてもどってくる。これでどちらの組が勝ったのかみんなに理解されたようである。「先生、もっとフラフープふやして」とB男の要求で、数を増した。たくさんくぐった方がおもしろいなあ、という声も聞えてくる。

クラスの半数以上の者が参加しても、順番を守って楽しくあそべるようになったので、このような機会を多く作って、能力がわななくて集団からはずれたり、自分からぬけだす幼児がなくなるようにしていきたいと思った。

他に、虫とり、なわとびなどであそんでいる幼児もいるが、ここでは、紙面の都合上省略する。

### 一〇・一五

それぞれの活動に十分満足したため興味が低下したことによるのか、幼稚園全体のふんい気がなんとなくたがたしてきた。

O子は、教師のところに来て、「先生、きのうみたいに、みんなでおゆうぎしましょうよ」といってくる。

「そうね、それでは、みんなにもそういつてちょうだい」と返事をして、教師は片づけはじめ。それに気づいた幼児たちもそろそろ片づけはじめ。

元気者のT男らは、もつと自分たちのあそびをつづけたいのであろうか「ちえつ、もう片づけとるわ」と不満顔をする。

ちょっとかわいそうな気持もしたが、あそびをうち切る経験もあってもいいと考え、T男たちの気持をわざと無視した。運動会前になると、たびたびこのような場面につづかり、教師自身も苦しむこともある。

しかし、運動会を機会に大きく幼児たちが成長していくことも事実なのである。だいたい片づいたので、きょうは、はじめて全員小学校の運動場にて、行進の練習をする。

### 一〇・三〇

せまい保育室を離れ、幼稚園児全員が小学校の運動場へ行く。はじめ、きょうきょうとあたりを見まわしたりする幼児も多く、揃って歩くことがむずかしかったが、慣れるにしたがって、曲に合わせて、だんだんじょうずに歩くようになってきた。この調子

で二、三回運動場を借りて練習すれば、幼児たちも落着いて、やるようになるのではないかと思う。

しかし、調子を合わせる感覚面で個人差がはげしいので、能力の低い幼児をいかに楽しくひきあげるか、これからの教師の努力にかかっている。

### 一一・〇〇

幼稚園児全員でのリズム活動は、緊張も伴い、幼児たちも疲れ気味のようすなので、部屋に入り、休息もかねて、教師が、全員の幼児に絵本『大男のかぶらかぞえ』を読んで聞かせてあげる。かぶらのしなびていくようすのおもしろさやエンマの知恵のすばらしさに、幼児たちは、いっしょうけんめい聞き入っている。

### 一一・三〇

#### 降園

### 三、おわりに

きょうもいろいろな活動が行なわれた。どの活動をとおして考えてみても、幼児たちは友だちといっしょにあそびたいという気

持が強く感じられた。

一学期では教師対自分という感情が強くはたらいっていたのに、このように友だちを求め、あそびを広げ、深めていこうとする態度に対して、教師自身は、なおいっそう、ひとりひとりの幼児をしっかりと見つめ、ある時は直接的に、また、ある時は側面からしっかりと援助してやらねばならないと思った。

一方では、能力のおくれた幼児や、性格的に集団に入れない幼児が、どの集団にも入れずにとりのこされることのないように、教師との心のふれ合いはもちろんのこと、幼児対幼児のふれ合いもしっかりととらえ、正しく指導してやらねばならないと思う。

まだ、幼児の要求が、友だちといっしょに行動したいということへ強く移行していく状態を教師自身、身をもって感じさせられた一日であった。

生活リズムを整えるために、何となく活動にしまりが無い感じが残ったが、この時期として、このような一日があってもいいのではないかと思う。

(四日市市立下野幼稚園)

こんな本  
あんな本

## 「童話への招待」

神宮輝夫著・日本放送出版協会



本田 和子

——子どもが妖精の国に行きたいとき  
道はいくつもある。ある子どもは、心か  
ら行きたいと思つてねむると、いつのま  
にか、のぞみの海をボートで渡っている  
ことに気づく。ボートはやがて湾にはい  
り夢の川をさかのぼつて、めぐす国には  
いる。ある子どもは、庭の金魚池をじつ  
と見つめていると、あぶくがうかんでき  
て、それが割れて、「あなたはどんな願  
いがあるか？」「池をじつと見ているのか？」  
という声のでてくる。子どもが「妖精の  
国へ行きたい」と答えると、その声があ  
ぶくになって沈んでいく。やがて少女  
は、自分が、池にうつっていた影の方  
のりうつつて、どんどん水の中へ沈んで  
いくのに気がつく。そして、あつと思つ  
たときには、もう妖精の国にきている。

——「童話への招待」から——

ここに引用された妖精の国への入国法  
は、イギリスの児童文学者アーサー・ラ  
ンサム著書からとられたものです。昔  
昔、人間の先祖たちは、各々の国にさま  
ざまな妖精（小人・家の霊などすべて不

思議な異形のものの意）を住まわせてい  
ました。北欧のトロール、スコットランド  
のブラウニー、アイヌのコロボックルな  
ど、その代表でしょう。

ところで、文化が進むにつれて、人間  
の社会は妖精たちにとって住みにくい所  
と変わってきました。何よりもおとなが  
妖精をきらい始めたからです。宗教の名  
のもとに、あるいは合理主義の風を受け  
て、妖精たちはしばしばその生存をおび  
やかされています。そんな中で、けんめ  
いにこの小さな者の生命を守り続けたの  
は、子どもたちと、子どもと同じ心を持  
つて子どもを愛する一群の人々でした。

私も、子どもと共に生きようとする  
おとなとして、子どもたちがこんなにも  
大事にしてきたこの目に見えない世界  
をのぞいてみる必要がありそうです。そ  
こで展開される冒険や愛情の物語を通し  
て、その中ではねまわり、いたずらを  
し、いきいきと生き続ける主人公をいとお  
しむことよって、子どもと一つにな  
る機会を持つてみてはどうでしょうか。

この本は、そんな世界へ私どもを導き入れる手引きをしてくれます。

全部で八つの章から構成されていますが、各々の章で十八世紀以降の代表的なフェアリー・テイルズ、あるいはファンタジーが紹介されます。例えば第一章「ペローとグリム」では、シャルル・ペローとグリム兄弟によって採録され再話された昔話を対照させながら、昔話の驚異と恐怖、その形式などさまざまに昔話の魅力をとき明かしてみせます。第三章「水の子とアリス」では、キングスレイの「水の子」が、おとなが子どもを理解する過渡的段階の作品として位置づけられていて、フェアリー・テイルズとは異なる想像力の世界、つまりファンタジーの先駆として評価されます。但し、著書は、これは児童文学の歴史の上での評価であって、現代の子どもに読ませる必要はないだろう、と註をつけることを忘れてません。このあたりに、行きどいた案内人としてのこの本の性格をみることでできそうです。

第六章「二十世紀のファンタジー」では、「クマのプーさん」「メアリー・ポピンズ」「ナルニア国物語」など、現代の子どもたちになじみ深い物語が数多く扱われています。愉快な子ぐまのプーの物語は、おとなのための作家が全力をあげて子ども部屋に取り組んだ例として紹介され、子どもにとっては子どもの世界そのものを描いた作品であり、おとなにとっては失われてしまった宝のようなスタルジアの世界として評価されます。

これに比して、「ナルニア国物語」は一九五〇年代の時代精神を反映し、ほろびと復活と永遠をテーマとして扱い、人間の未来への警鐘、永遠を求めることによって到達し得る未来への確信を、幼い人々に伝えるための大アレゴリーとしてとらえられています。

著者は、フェアリー・テイルズを、昔話に代表されるいわゆる公認された魔法の世界の物語、ファンタジーを、現実への密着度がより高く、時代をはなれては成立し得ない空想の物語として区別して

います。この「ナルニア国物語」など、まさしく二十世紀のファンタジーの典型というのでしょうか。

さて、こうしてこの本は、私どもをさまざまな作品に出会わせ、その生い立ちと性格を手際よく紹介してくれます。そして私どもに、これらの作品ともう一度深くつき合ってみようかな、という気持ちを起こさせるのです。とかくイデオロギー性の勝ったものや、逆に、あまりにも性急な實際性に富みすぎた児童文学論の多い昨今、楽しく素直におとなを手引きしてくれる本の一つといえましょう。

——子どもの文学に対するおとなの圧迫は、今も過去のものとはいえない。現在のおとなが、宗教や道徳や、知識偏重や公式的なイデオロギーで、たえず子どもを文学をしぼることはやめているとしても、べつの偏見で、真に子どもの求めている文学を圧迫していることは十分に考えられる。おとなは子どもの文学について、つねに謙虚でなくてはならない。

——「同書」より——

## お茶の水女子大学

### 幼児保育現職研究のおしらせ

幼児教育の現職者が保育の原理を研究するための定期研究会を開く予定ですので、希望の方は左の要領で申込んでください。

一、昭和四十六年四月より、コースごとに週一回、定期的に開催する。

一、お茶の水女子大学の教官が担当する。

一、午後五時―七時とし、コースごとに曜日を定める。

一、定員 各コース約十五名以内

一、資格 幼児保育の現職経験のある者、短大卒またはそれに準ずる者

一、規則書 希望の方は左のようにお申込み下さい。

東京都文京区大塚二―一―二(〒112)

お茶の水女子大学家政学部児童学科内 幼児保育研究室内 現職研究会宛

氏名、生年月日、住所、現職を記し、十五円切手を同封して封書で申込む

こと。

電話 (943)―三二五一、内線三三〇、三三六

申込期日 昭和四十六年二月末日まで

幼児の教育 第七十巻 第三号

三月号 © 定価八〇円

昭和四十六年二月二十五日印刷  
昭和四十六年三月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

111 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ二一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレーベル館にお願いいたします



好評発売中

ポニーキッターカセット

# 世界の名作童話(全6巻)

絵本とカセットがワンセット!!

世界の名作童話



## 時代をリードする視聴覚出版!!

カセットテープと絵本を組み合わせた新しい視聴覚教材です。フレーベル館がカセットテープの雄ポニーと提携し、開発したもので、世界の名作童話の香り高いロマンを視覚と聴覚の両面から伝えるこのシリーズは、保育に役だつものとして大へん好評です。アンデルセン・グリム・ギリシャ神話・世界の民話・日本の代表的作家の作品・日本民話などから36話を厳選し、全6巻にまとめました。各巻とも6話ずつで豪華絵本とカセットテープ3本を、美しいパッケージに収めてあります。

第1巻・裸の王様 ライオンのめがね 白雪姫 三匹の子ぶた 泣いた赤鬼 ものぐさ太郎

第2巻・人魚姫 ノアの箱舟 ヘンゼルとグレーテル ジャックと豆の木

注文の多い料理店 牛方と山姥

第3巻・ハメルンの笛吹き 太陽の馬車 親指姫 狼と七ひきの子ヤギ 手ぶくろを買いに 雪女

(以下続刊・各巻とも毎月下旬発売)

定価各巻 5,700円

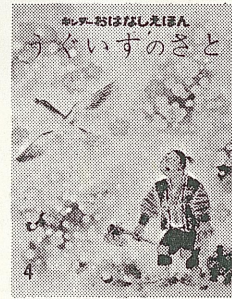
☆「世界名作童話」は全6巻でご予約ください。全6巻ご予約いただいた園には、素晴らしい記念品を差し上げます。お申込は最寄のフレーベル館代理店・支社・支店・出張所へ。

株式会社 フレーベル館



4月号からは、いつそう充実した内容になります。

増頁断行で



キンダーブック①は、幼児に身近かな事柄をテーマに、観察的な要素を十分にふまえながら幼児の情操を豊かに、創造性を育てていく伝統ある保育絵本です。

4月号では、春の牧場に遊ぶ子羊と雲が展開する幻想的で美しく楽しい物語りて、幼児はもとよりお母さま方にも拍手をもって迎えられる絵本です。

4月号① もこもこくんの おとも  
だち A4判 20頁 多色刷  
つばめのおうち・工作付録つき  
定価1100円 団体購読価1000円

キンダーブック②は、幼児の科学に對する興味やあこがれを正しく伸ばし、育てるように配慮された、楽しい観察絵本です。

4月号では、現代社会に欠けている自然に子どもを返すべく、幼児たちが力を合わせて自然を再生させていく姿を描き出します。アフリカの動物図鑑とともに絵本の中の自然を充分お楽しみください。

4月号② こどものしなをつくらう  
A4判 36頁 多色刷 つばめのお  
うち・工作付録つき  
定価1400円 団体購読価1300円

民話は、名もない1人1人の庶民のこころの中から、いつとはなしに生まれ、語りつがれてきた民族の遺産です。本誌4月号では、入園進級した園児のために日本の民話をとりあげました。1人のきこりの若者と、別名春告鳥と呼ばれるうぐいすとの、とある山里でのふしぎなできごとを描いたおはなしです。

4月号③ うぐいすのさと・文・後藤楯  
根 絵・黒崎義介 L判 36頁 多色刷  
つばめのおうち 4月号特別付録つき  
定価1400円 団体購読価1300円

子どもたちの周辺に存在するあらゆる問題を、新しい角度から取材し、より核心に触れた材料を、お母さま、先生がたへおとどけます。4月号からは増ページして、特集記事を満載いたします。毎日のお弁当のおかず、簡単に作れる美しい刺しゅう等カラーページを駆使してより充実した内容で登場いたします。

4月号 L判 40頁 多色刷  
手芸型紙付録つき 定価  
1100円 団体購読価1000円

フレーベル館の  
4大月刊保育誌を推薦します。

評論家 大宅壮一 茶道家 裏千家 塩月弥栄子 生花家 安達瞳子 評論家 楠本憲吉 音楽家 石井好子  
東京・ちぐさ幼稚園園長 山口猪祐 東京・港区立新幼稚園園長 湯浅晃一 東京家政大学教授 山下俊郎

発売  
フレーベル館